

---

# 甘党絵描きが幻想入り

甘宮ソラ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

甘党絵描きが幻想入り

### 【Nコード】

N9779W

### 【作者名】

甘宮ソラ

### 【あらすじ】

八雲 紫はスキマをどこかへ繋いでいた。藍が理由を聞くと、暇だから遊びで繋いでいる、と言う。藍はため息をついたがそれも理解できる。最近の幻想郷は暇すぎて仕方がない。

そんな時、スキマから誰かが入ってきた。そしてその日から、事件は起こる。

## 暇すぎる幻想郷（前書き）

この物語は幻想入りを書いた東方二次創作品です。up主の独自設定。キャラ崩壊等起きている場合がございます。そういうのが苦手な方は速やかに戻るボタンを。それでもおkと言う方は、ごゆっくりとお楽しみ下さい。



「ですよー。(まあ、わかってましたけど。)」  
とりあえず藍は気になる事を問いかけてみた。  
「しかし、一体何処にスキマを繋いでいるんですか？」  
すると紫は普通に説明をしてくれた。  
「それは私にも分からないわ。スキマを作ったときに適当に選んだものだから。」  
「はあ。でもなぜそのようなことを？」  
紫は怪しい笑顔を浮かべた。  
「決まってるじゃない。だってそっちのほうが……、」  
紫は拳を硬く握り締めた。  
「面白いじゃない……ツツツ!!!!!!」  
「ですよー。」

#### 博麗神社

博麗神社の庭では、霊夢が掃除をしていた。  
「……ふう。駄目ね。ずっと掃除なんかしてても暇になるだけだわ。」  
すると向こうから声が聞こえてきた。  
「おーい、霊夢ウ。」  
「あら、魔理沙に、アリスじゃない。何か用？」  
「暇だから遊びに来てやったぜ。相変わらずしけた顔だな。」  
「ふーん。にしても、アリスがわざわざ来るなんて珍しいわね。」  
「わ、私だつて来てくれてきたわけじゃ……。た、ただ魔理沙がどうしても付き合っただけだから……。ぶつぶつぶつぶつ。」  
「なんか言っただか？」  
「な、何も言っただけじゃないわよ!!!!!!」

ギャーギャー言っているアリスを放っておいて、霊夢と魔理沙は会話を続けた。

「なあ霊夢ー。せつかく遊びに着たのに何もなかったのは無しだぜ？せめてお茶とお菓子くらいはほしいぜ。望み薄いけどな・・・。」

「お茶をたかりに来たのなら、せめてお賽銭くらい入れていってほしいわ。もうお賽銭箱の中身はペリカすらないんだから。あとアリスうるさい。」

「うるさいってなによー！」

「金持ってたたら苦労しないぜ。それに暇で暇で仕方ないんだよ。アリスも同じ意見らしいぜ。あとなんだよペリカって。欲しいなら地下帝国行って働いて来い。」

「はあ、まあ暇なのには意見は一致だけど・・・。」

3人が何か暇をつぶせるものがないか悩んでいると横から声をかけられた。

「だったら面白い記事ありますよー」

霊夢はまたため息をついた。

「はいはい、どうせいつものくだらない記事じゃ・・・。」

射命丸 文はニコニコ笑っている。

「って、のわっ・・・！！あ、文・・・?!」

「どーも、霊夢さん。お暇ということなのでこの特別号をお見せします!」

文はズいっと新聞紙を差し出してきた。

「あ、ああ・・・。まあいつもの記事だとは思っけど・・・。」

「まあ、そうおっしやらずに。じゃあ私はまだいくところがありますので、失礼します!」

そういって文は高速で飛んでいった。霊夢は新聞を無言で見ている（どうせいつものくだらない記事だろうし、一体何処に面白い記事なんて・・・。）

しかし書かれていたことは意外な記事だった。

「ん・・・?」

霊夢は記事を読んだ。

「・・・八雲 紫が謎の目的地にスキマを作った。何か幻想入りしてくるのも時間の問題・・・？」

魔理沙も釣られて記事を読んでいる。

「八意 永琳が新しい薬を開発。しかし未だに効果は判明していない。」

写真には薬の入ったビンが写りこんでいる。

「ね、願いを書き込めば必ず叶う本が存在するらしい。人間の里ではブーム？」

アリスは意外な本の存在を知って驚いている。

3人は新聞をずっと見ていた。

### 紅魔館ベランダ

「そう、わざわざご苦労様。」

「いえいえ。では、ありがとうございました。」

文は紅魔館から飛び出て行った。

ベランダにいるレミリア・スカーレットは新聞を手を取っている。

「ええ、こちらこそ。ではこれはもらっておくわ。じゃあ。」

文は手を振って飛んでいった。

「お嬢様。お茶をお持ちいたしました。」

十六夜 咲夜はレミリアの前に紅茶を置いた。

「あら、有難う咲夜。気が利くわね。」

「文から新聞を貰ったんですか。一体どんな内容だったんですか？レミリアは新聞を眺めた。」

「さあ・・・。不思議ではあるけど、あまり変わりはないわね。変わってるといえば、こーりんの店が白蟻に食われてるくらいしか・・・。」

「それけっこう問題ですよね。あ、でもこの願いが叶う本なんかパ



「い、妹様！おやめになつて下さい！小悪魔が・・・、小悪魔がな  
んかもう幼稚園児に振り回されるクマの人形みたいに・・・！！！」  
「これ以上暇になるならお姉様の身包み剥いで売りまくっちゃうぞ  
おおお！！！」  
「工工、是非！」  
「咲夜ああああ！！！！！」

### 永遠亭

「んー、どうしようかしら。これ。」  
八意 永琳はある薬を見て唸り声をあげていた。  
奥の扉が開き、鈴仙・優曇華・イナバが入ってきた。  
「？・・・、師匠。どうかしたんですか？」  
「ん、ああ・・・。ちよつと昨日の夜からね、暇なんで新しい薬を  
作ってたんだけど、途中薬の香りのせいで寝ちゃつてて・・・。」  
「夜の変な叫び声や爆発音つてその変な薬が理由だったんですか！  
？」  
優曇華は思わず薬から退いてしまった。  
「はぁ・・・、はぁ・・・。あ、でもその薬つて、」  
優曇華は横目で薬を見た。  
「一体どんな効力があるんです？なんか色が全体的に黒い・・・。」  
その薬は色が黒く、禍々しいオーラを放っているようにも見える。  
「さあ、私にも分からないわ。なんせ寝ちゃつてたから。材料リス  
トはあるにはあるけど、調べ終わるのは少し時間がかかるかもしれ  
ないわ。」  
「はぁ・・・。」  
「ま、それは私に任せといて。それより、庭の掃除をしてきてくれ

る？ 姫は相変わらずぐろぐろしてるし、てるはどこかに出かけちゃ  
ってるみたいなの。」

「分かりました。」

そういつて優曇華は部屋をでた。それと同時に永琳はため息をつい  
た。

「私としたことが失態だったわ。早く効力調べないと……。」

永琳は背もたれの椅子にもたれかかった。

「……にしても、」

永琳は窓から空を眺めた。

「本当に、暇なのよねえ。」

空からは何かが飛んでいるような姿が見えた。

## 暇すぎる青年

空から飛行機のエンジン音が聞こえてきた。辺りからは子供の遊ぶ楽しそうな声が響いている。

公園のベンチにワイシャツ姿の青年が座っている。容姿は普通。なのに頭には猫のような柔らかい素材のかわいらしい帽子を被っている。いかにもおかしな格好だった。

「ああー、暇だなあ。だれかからかいたい……。」  
ソラ、という名の青年は嘆いていた。こここのところ暇で暇で仕方がない。得意の漫画を描いてもネタが思い浮かばない時もあるし、まあ、大好きな甘いもの食べてるときは幸せだけど。

「……。」  
ソラは鞆を見た。鞆を開けると、中には色々なものがつまっていた。「さて、漫画の絵描いところかな。」

ソラは頭を屈めて絵をかき始めた。  
するとネコ帽が落ちてしまった。

「あ……！」  
慌ててネコ帽を拾うとゴムを確認した。

「ああ、緩くなっちゃってる……。」  
どうにか戻そうと試行錯誤しているといつの間にか子供達がたかっていた。

「ねーねー兄ちゃん。なんでそんな変な帽子被ってるの？」  
ソラは子供達をみた。

「決まっているだろう。猫が大好きだからだ。あと犬も。」  
「変なのー。変なのー。」  
と子供達がからかっている。

「変なのとはなんだ変なのとは。これでも自作だぞ。」  
それでも子供達は笑いながら去っていった。  
「全く。まあ、悪気はないんだろうな。」

ゴムを直しながら自分の描いた絵をみた。

「・・・あー、なんかこう、描いた絵が飛び出るとか、それと同じ効果が現れる絵が描けるとか、とういう厨二的なこと起きてくんねえかなあ。」

そう嘆いてソラはベンチに横たわった。

彼は厨二病な面もある。まあ、漫画家志望で、小説も描いて、尚の事少しばかりマニアな面もある。人柄はいいとはされているが、親友からは甘党ドSって言われてるし、演劇仲間からはただの楽しい面白い奴といわれる。それは嬉しいのだが、やはりこう、面白い展開がないとつまらない。でもそうもいつてられない。高2だし、来年は受験だし、漫画家目指さなきゃいけないし。大変な毎日だ。

「はあ・・・。とりあえず、」

青年は目を瞑った。

「寝る。」

鞆を枕代わりに寝てしまった。

数時間がたった。

子供達がトイレの隅で騒いでいた。

「ねーねー、なんだろこれ。」

「知らない。うねうねしてるね。」

「ねえ、なんだか怖いよ・・・。家かえる？」

子供達は得体の知れないものを見て怖がっていた。子供達がキヤーキヤー騒ぐ叫び声でソラは目を覚ました。

「んあぁ・・・？」

重たい身体を起こして、子供達が騒いでいる方向へ向かった。

「どうしたー？なんか怖いものでも見つけちゃったのかー？」

「あ、変な兄ちゃん。これ、こっちきて！」

ソラは手を引かれたので、焦ってかばんを持ってネコ帽を手で押さえた。

「な、なんだなんだ!」

連れて行かれたのはトイレの隅。無理に引っ張られてきたのでソラは少し息を切らしている。

「ほら、これ。」

「怖いよー!」

ソラは片目で目の前を見た。

「は、はあ・・・!?!」

正直、驚いた。

目の前にあつたのは、動画サイトでもよく見かける、東方projectの有名なもの。

スキマだった。

「な、なんでこれが、こんなところに・・・?」

夢でも見ているのだろうか。東方で見かけるスキマが、この現実世界で発生している。こんなことが起きていいのだろうか。

「・・・。」

「兄ちゃんどうかした?」

「凄い驚いた顔してるよ?」

はつきりいって子供達がなんていってたのかわかんない。正直少し嬉しい面もあった。夢であれど、意識はしっかりしている。

「・・・。」

ソラは頂垂れた。

「?・・・兄ちゃん、どうかした?」

ソラは両手を中に突き出した。そして次の瞬間、

「なんか知らんが来たああああああああああああああああああああ





幻想へ……。(前編)

「あら、ようやく何か入り込んだみたいね」

紫は早速スキマを覗き込んだ。

「やっとですね。でも一応注意はしておいたほうがいいんじゃない？」

「大丈夫大丈夫!! さあ、なにがかかったのかしら？」

藍はため息をついた。

(本当に大丈夫なんですかねえ……。まあ、楽しそうにしていればこっちも気が楽になるし、問題が起こるわけでもな)

突然物凄い木の割れる音とドゴっ! という、金槌頭蓋骨を叩き割ったようなエグい音が鳴り響いた。

「ん、ドゴ……?」

紫はあまりにも悲惨な状況になっていた。悪く言えばみせられないよ 状態。

「ゆ、紫様あああああああ!？」

「ああ、れ、霊夢が……。ああ、そんなとこ、らめえ……」

藍は紫を黙視していた。すると天井から木の屑がパラパラと落ちてきていることに気がつき、ゆっくりと天井を見た。

天井にはドデかい穴が空いていた。

「い、一体……、何が……、」

何が入り込んできたんだ？

その光景は博麗神社からも見えた。

「うおっ!？」

魔理沙は驚いていた。

「な、なんだありゃ……!」

「ば、爆発・・・?!」

霊夢も同じように驚いていた。

「で、でも・・・。」

驚きながらも冷静を取り戻しているアリスは空高く飛び立っている謎の物体を見た。

「爆発だったらもつと被害がひどいんじゃない・・・。」

爆発音みたいな音は徐々に小さくなっていき、やがて放物線を描いて地上に向かっていった。

「あ、おちてくぜ。」

「あそこ、迷いの竹林のほうね。」

3人は黙ってその光景を見ているだけで動くことはしなかった。

「・・・。」

ソラは半目になってあたりを見回していた。

「うん、そうだな。俺も少し冷静になろう。だが、この状況でどうやって落ち着いていられる。」

ソラは腕を組んだ。

「まず甘いものを食べて、そこからまず地上へとおりたとうではないか。ここらへんが竹やぶってことは、まず人がいる可能性はある。日本ってこともだ。コレで安心だ。でも・・・。」

ソラは顔を蒼くした。

「どうしてこうなった・・・。」

原因はソラが竹やぶに引っかかってしまい、身動きが取れないためしかもワイシャツの裾の部分が上手い具合に引っかかってしまい、首が絞まる。

「おええ・・・。は、早く降りねえとマジでやばい、かも・・・。」  
ソラは決心した。

「よし、まあここは竹をつたっておりにする……」  
突然ワイシャツの引掛かりが直って取れてしまった。

「か……」  
ソラは地面に向かって落下した。

「マジかああああああああああああああああああ……!!」  
勢いよく地面に落下した。

「ぐわらばっ!」  
それでもソラはゆっくりと起き上がった。

「うむ、計画通り（？）だな。さて、まずここはどこかを調べないと」

「お、おい……」  
ソラは声がした方向を向いた。

「大丈夫か？」

目の前にいたのは藤原 妹紅だった。ソラは目を真ん丸くさせて死んだような感じな驚き方をしている。

「……?」

突然ソラは逆方向を向いて考え出した。

（ええ……?!?!?!?なぜ、なぜだ!?なぜ俺のベスト3にはいる妹紅が目の前に……?!?あ、ありえない。とうとう俺がおかしくなったのか?それとも本当に目の前に妹紅が?!いやまてれれれ冷静になれ。素数を数えるんだ。あれ、素数ってどれだっけ?んなことどうでもいい!多分さつき頭を打ったのが原因だ。しかもこれは夢の可能性がある。だが、覚えている。俺はさつきスキマに入った記憶が。曖昧だが、それは……。いや、それも夢の可能性が高い。しかし妙にリアルすぎる。じゃあ、これは現実なのか?目の前に妹紅がいるのも……。

いや、喜ぶな!これは俺がおかしくなったんだ。あまりにも幻想郷を求めすぎるためにこんなことになったんだ。そう思うと頭が冴えてきたぞ。そろそろ起きて馬鹿な親友共のところへいこう。そしてこんな夢を見たと自慢しよう。そうだ。ふりむけば誰もいないさ。



「何これ、カッコいい!!!」

チルノはネコ帽を拾って被り始めた。

「うおおお!!!」

そこ頃、優曇華は竹やぶの近くで蹲っていた。

「な、なに。今の？」

大きな買い物袋をぶら下げていた優曇華は心配そうに空を見ていた。

「今の爆発音。ここらへんに落ちてきたなあ。ひよつとして異変？  
ここの所何も起きなかったから妖精たちが悪戯でもしかけたのかし  
ら……？」

心配してきたがこちらに被弾の可能性もなさそうなので、安心して  
永遠亭に戻ろうとした。

「……てゐの奴、手伝つてっていつておいたのにいなくなっちゃ  
つて……。おかげで一人で買出しになっちゃったじゃない……。」

「

優曇華は真横の竹林を見た。

「さっきの音。よくわからないけど、爆弾だったりしないかしら？  
永遠亭に落ちてたらまずいわ……。」

優曇華は真剣に考え始めた。

「でももしこれが本当に異変だったとしたら……。少なくとも幻  
想郷で何かが起こる可能性がある。だとしたら今頃霊夢や紫さんも  
動いてるはず……。私も一応警戒しとかなきゃ……。」

しかし今の問題は爆発音ではない。この買い物袋の異常なまでの重  
さだった。

「……その前に私の腕に異変がおこるんじゃないやあ……。早く帰っ  
て腕を休めよう。いくらなんでも、」

優曇華は真横を見た。

「重すぎ……。」

なぜかそこに可笑しなものがあつた。見たことない造型のもの。これはまるで岡 太郎作のあの塔そっくりなものだった。

「……なにこれ?!」

思わず優曇華は退いてしまった。

「師匠! 竹林辺りに変なものが……!!!」

と、優曇華と同じ背丈くらいの太陽の塔を抱えてきた優曇華。

「その重そうな塔と重いはずの重い物袋をぶら下げてくる貴女も相当変に思われるわよ?」

「そ、それだけじゃなくて……! さつき変な爆発音もあつたし、それにこの竹林に落ちてきたみたいだし……! 大丈夫なんですか!?!」

永琳は薬の効力を調べている。

「大丈夫なんじゃない? こつちまで被害は来てないし、そこまで怖がるような事でもないわ。」

「で、でも……。」

永琳はこつちを向いた。

「優曇華。最近暇なのは分かるわ。たしかにこういうことにも敏感になるかもしれない。でもたかが爆発音よ? そんなの弾幕勝負やつてれば普通に発生するわよ。」

「そうですね……?」

二人がギャーギャーやっている光景を、壁の影から見ている姿があつた。

てゐが目を怪しく輝かして覗いていた。明らかに何かを狙う獣の目。その目線の先にはあの謎の薬。変な塔も気になるが手に入れたのはあの薬。

「うっさつさ……。」

てゐは気付かれないように小刻みに近づいた。

「とにかく、危険とわかつたら逃げ出してくださいよ?」

「わかつたわ。どうでもいいから姫起こしてきてよ。」

「もう……。」

優曇華が動こうとした時、てゐは動きを止めた。

(……ばれる?)

しかし幸運が訪れた。むこうから輝夜の声が響いてきた。

「えーりん。お腹すいたー。」

輝夜の声が響いた瞬間、優曇華と永琳は別の出口の方を向いた。その瞬間をてゐは狙い、薬を奪った。

(ちよろい……!)

そしててゐは俊足で外へと出た。

竹林あたりを疾走しているてゐは怪しく笑っていた。

「くくく……。危なかつたけど、今回は容易く取れたウサ。」

てゐはこの先どんな悪戯をしようか考え出した。

「さあー、はやくそんじょそこの人間とか妖怪にこの薬を……。」

「

すると竹林の中から声が聞こえてきた。

「ん……?」

そこにいたのはソラと妹紅だった。

「サンキューな。落とした絵一緒に探してくれて。」

ソラは手に絵の入ったケースを抱えている。

「まあ、見られたのは流石に恥ずかしかったけれども……。」

妹紅は絵を見て少し微笑んでいる。

「いや、でもこれいいよ。背景綺麗だし。」

「いや、あははノノノ」

てゐはその光景を黙ってみていた。

(あそこにいるのは、姫の遊び相手と、誰?ここは確か私が掘った落とし穴デンジャー区域。そしてなんかいいムード。そして興味深いのはあの男が抱えている箱!)

その時、てゐに電流走る!

(あそこは数多くの落とし穴がある。そして二人は向かい合うようにたっている。とりあえずあの男を落とし、あの箱を手に入れる。

だが、どうやって取るう……。）

「ほら、とりあえず無くした帽子探しに行こう?」

てゐが目をギンギンに輝かせた。

（帽子……だと。そうと決まれば……!）

てゐは竹林の中に隠れた。

「まあ、案外帽子も早く見つかるかもしれないぞ?」

「とはいっても、幻想郷って広いしなあ……。」

すると奥から声が聞こえてきた。

「あー、へんなぼーしおちてるー!」

その言葉を聞いた妹紅は声のした方向を向いた。

「あ、ほら。早速それらしい言葉が」

ソラは目を輝かせて物凄いスピードで走り出した。

「真っ赤な誓い……!」

「つて、おい!早いつて……!走ると危ないから!ここらはちよ

つと……!」

「大丈夫だつて!俺別に危なくつても気にしないから、心配な」

ソラは見事落とし穴にはまった。

「い……い……つ!」

「案の定綺麗に落とし穴に落ちたあ!」

ソラはおかげで絵の入ったケースを空中高く放り上げてしまった。

すると竹林の中からてゐが出てきた。

「!」

てゐは笑いながらケースを手にとった。

その頃ソラは落とし穴の真ん中あたりで手足を伸ばして踏ん張っ

ていた。

「ふんごおおおおおおおつ……!」

落とし穴の底には先が尖った竹が何本も突き刺さっていた。

「あ、危ねえ……!」

すると笑い声が聞こえてきた。

「あーっはっはっはっはっはっは……!」





すね。」

その後ろから犬走 椛がやってきた。

「文さん。やっぱり見に行くんですか？」

「当たり前です。多分原因はスキマ妖怪のスキマのせい。何か幻想郷に入り込んできたのでしょうか。これは記事にせざるを得ません！ちよつとにとりにいって捕獲道具をもらってきてください！」

椛は驚いてしまった。

「捕まえるつもりですか!？」

「捕まえて何か面白い記事をかきます。相手が生物であることを祈ります！」

そっぴい残して文は飛び立った。

「はぁ……。」

「んー。」

西行寺 幽々子は竹林上空を見つめている。

「どうかしたんですか？」

魂魄 妖夢は素振りの練習をしながら幽々子に問いかけている。

「……妖夢。ちよつと様子を見てきてくれない？」

「竹林辺りですか？ヤツパリ気になるんですね。」

「ええ。なんかね、変な感じがするのよねえ。」

「変な感じ、ですか？」

「何かが入り込んできた、というより、誰かが入り込んできたみたいね。でも普通じゃないわねー。なんでかしら。」

妖夢は首をかしげた。とりあえず自分も気になるので、様子を見に行く事にした。

「それじゃあ、行ってきます。」



「はあ……。はあ……。」

てゐは怒ったような顔をしている。

「全く……。なんなんだあの変なやつ……。」

てゐは辺りを伺った。ソラはもういない。

「ふん……。諦めたか。全く、やっぱりあいつは私より弱いんだな。ふふん」

ソラはてゐの真横で笑っている。

「はははーでもね、そういう奴ほど怖い時つてあるよね」

「そうなんだよねー。あたしも時々打たれ弱いときが……。」

てゐは真横をみた。

「……。」

「……にやり。」

その瞬間、てゐは悲痛な叫び声をあげた。

「ん……？」

比那名居 天子は要石に座りながら叫び声の聞こえた方向を見た。

「なに、いまの？」

天子は叫び声のした方向をずっと見ていた。すると誰かが何かを持って歩いてきた。

「……！」

その光景を見た天子は顔を真っ赤にした。

てゐがロープにぐるぐる巻きにされて宙吊りにされている。そのロープをソラが黒い笑顔で持っている。

「……ごめんなさい。」

てゐがポツリといった。

「で？」

「……許して下さい。」

「やだ。」

「……もうしません。」

「立証がない。」

「……すみませんでした。」



天子は飛ばされながら思った。

(なに・・・？なんなの・・・？この激しい痛みその後には迫って来るこの、じわじわ・・・。激痛の後のじわじわがなんか、あれで・・・。あんな恐ろしい笑顔で殴られて・・・。こんなの、こんなの、こんなのって・・・。)

次の瞬間、天子はめちやくちやいい笑顔になった。

(最つつつつ高じゃないの・・・//////////)

そして天子は無様に地面に落下した。

「っち・・・。」

ソラは手元を見た。ロープはない。いつの間にかてゐが逃げ出してしまった。

「逃がしたか・・・。」

天子は震える手でソラの足首を掴んだ。

「ん？」

ソラは足元を見た。

「あ、ああああ・・・!!」

天子は血まみれになりながら唸っている。

「ぎゃああああああ!!」

ソラは天子を蹴った。

「あんっ・・・//////」

天子は色っぽい声をあげながら転がっていった。

「・・・あ、お前。比那名居 天子か？」

「あ、あれ・・・。なんで私の名前を知ってるの？どこかであった・・・？」

「・・・？」

「ああ、会ったってどうか、画面の向こうで会った。」

「・・・？」

ソラはかがんで天子の顔をまじまじと見つめた。

「どうした。ひどい怪我だぞ。どんなひどい奴にやられたんだ？」

「あんた！あんたよ！こんなにひどい怪我させたひどい奴あんた・・・

「!!!!!!」

「ええ!?」

「なんで驚いてるのよ!今までの文面読み返してみなさい!確実に犯人あんだ!!!!!!」

ソラは吃驚して後ろを向いた。

「後ろに誰もいないっての!!!!!!あんだよあんだ!えつと、名前!名前教えなさい!」

「大田原源三郎ノ助太(笑)です。」

「偽名いいいいいいいいいい!!!!!!大田原源三郎ノ助太(笑)って絶対偽名いい!!!!!!」

「うるせええええええええええ!!!!!!俺はソラだああああああああ!!!!!!間違つてんじゃねえええええ!!!!!!」

といつてソラは天子にびんたをかました。

「何でええええええええええええええええええええ!!!!!!」

天子は地面を転げまわった。

「い、痛い……/ / / / /」

「よし。てゐいなくなっちゃったから。代わりは天子でいいな。」

「へ?」

ソラは天子の顎に手を添えた。

「え……。」

「なにはともあれ、ここであつたのも何かの縁だ。よろしくな、天子。」

天子は少しだけ嬉しくなった。普段幻想郷のみんなは私のことを天子ではなく天子と呼ぶ。でも目の前の人は、優しい笑顔で私のことを天子と呼んでくれた。

「え、あ……。よ、よろしく、おねがいます/ / /」

ソラは笑顔で天子の首に首輪をかけた。

「…….ソ、ソラ……さん?これは一体。」

「……よつしゃいくぞー。」

そういつてソラは天子を引っ張っていった。

「エ…….ちよ……ええええええ!!!!!!」

てゐは奥に隠れてソラたちを見ていた。

「た、助かったあ……。」

ソラたちが歩いていったのを確認し、てゐは隠しておいた薬ビンを取り出した。

「こ、こうなつたらこの薬をあの男に……。」

てゐは怪しい笑顔になり、薬のビンをあけて木々の間から出てきた。

「私に屈辱を与えた罪。重いぞ……。」

てゐはどどん近づいていった。徐々に怪しい笑顔が怖い笑顔になってきた。

「覚悟っ！」

と、薬のビンを投げつけようとした。

しかしてゐは足元の石に躓いてしまった。

「えっ……。!?」

てゐは派手に転んでしまい、薬を地面にぶちまけてしまった。

「!?」

ソラと天子は吃驚して後ろを向いた。てゐは転んだまま微動だにしない。

「……。」

てゐはゆっくりと起き上がり、ソラたちを見つめた。

「……。」

てゐは涙目になって顔を真っ赤にしている。

「み、見りゆなああああああ!!!」

噛んじやいけないところで噛んでしまったてゐは走り去ってしまった。

「ああ……。」

てゐを止めようとしたが、その前に目の前から居なくなってしまった。

「なんなの、あの兎？」

天子は首をかしげている。ソラはかがんで薬に手をつけた。

「大方、この薬かけて仕返ししようとしたんじゃねえ？色々と遊ん

「でやったし。」

「・・・ところで、あんた私と会って数分しか経ってないのに、なんでそんなフレンドリーなわけ？」

「とりあえず天子は一番疑問に思っていたことを言った。」

「んー。あれだ。お前は会った事ないんだろうけど、俺は会った事あるからさ。」

「天子はますます分からなくなった。」

「????」

「ま、いいさ。それより、幻想郷案内してくれねえか？俺もここ来たばかりで慣れないんだよ。」

「天子は首輪を見つめた。」

「いや、今の状況だと私、案内されそうな格好だよね・・・。」

「まあ、いいじゃん。」

「ソラたちはまた歩き出した。」

「その時、葉が少しだけ煙を吐いた。」

「ふーん。その外の世界、だっけ？そこでスキマを見つけて、虫に驚いてスキマに落ちちゃって気がついたら幻想郷に居て、そこで死ぬに絡まれてそこから今の状況におちいつてるってわけね。」

「そうそう。」

「不思議なものねえ。外の世界なんて。ここよりいいところ？」

「いや、ここより最悪だろうな。」

「へえー。」

「天子とソラは他愛もない話をしていた。」

「首輪外してくれたのは嬉しいんだけど・・・。」

「しっかしほんといいところだなあ。」

「でも気を付けなさいよ。最近暇だったんだけど、時々弾幕が飛んできたり、空から何か飛んできたり・・・。」

ソラは笑い始めた。

「はっはっは！そんなの避ければいいだけだろ。それに俺案外タフだし。」

するとソラの真上に人影が現れた。

「あ。」

天子は気がついた。

「来るなら来てみるってんだ。はははははははははは！」

突然ソラのもとに誰かが降りてきた。ソラが居たところはものすごい衝撃音ともものすごい砂煙が大量に舞った。

「げほっ……！げほっ……！！！」

天子は苦しそうに咳をした。

「ソ、ソラ……！？」

次に天子が聞いた声はソラのものではなかった。

「いったあ……！」

声は明らかにソラではない。もつと幼い、女の子の声。

「し、失敗しちゃった……。」

砂煙が風で消えていった。するとその姿がようやくみれた。

「ま、いつか。屋敷から抜けられたんだし。」

天子は驚いた。

「あ、あんた……。」

天子は指差して叫んだ。

「吸血鬼の妹……！！！」

ソラの背中に乗っていたのはフランだった。

「あれ？私誰かの上乗ってる？」

ソラは呻き声をあげて地面にめり込んでいた。

「ソラああああ？！」

「あ、ごめん。」

フランはぴょんと背中から飛び降りた。

「ちよつと、大丈夫！？」

ソラは口から血を吐いていた。

「げふっ……!!!!」

「よ、良かった。生きてた。」

「お兄ちゃん大丈夫？」

ソラはゆっくり立ち上がった。

「だ、大丈夫だ……。これくらい……。」

「いや、大丈夫じゃないでしょ！だって悪魔の妹だもの！全てを破壊する程度の能力だもの！明らか背骨だけじゃなくて内蔵までぶっ壊れる音響いたもの！」

天子が心配してソラに歩み寄った。

「……ねえねえ、お兄ちゃん。」

フランはソラを上目遣いでみた。

「ん、なんだ？」

「お兄ちゃんみた事ないけど、ひよっとして爆発音の人？」

「ああー。まあそうだよ。あと上目遣いで俺くらいの年の人にあまり話しかけちゃいけないぞ。その種の人は怖いからな。」

「?……よくわからないけど、あんな凄い爆発音出せるってことは、お兄ちゃん強いのか？」

「んー、強いのは分からないけどなあ。まだ能力も持ってないみたいだし。」

天子は心配してソラを止めようとした。

「ちょっと……。危険だから弾幕勝負はしないほうがいいって！この子まじでつよいから！」

「いやー、いいじゃん。だって外に中々出れないんだろ？遊んでやったほうがいいじゃん。」

心配している天子とは裏腹にフランは大いに喜んだ。

「やったあ！それじゃあこれで、」

突然フランは吸血鬼みたいな目つきで空をにらんだ。

「コレで心置きなく壊そうとしても心配ないよね？」

ソラはニッコリ笑顔になった。

幻想へ……（後編）

一つの小屋の前に男がたたずんでいた。

「ふむ……。これは参ったね。」

森近霖之助は自分の店のことで悩んでいた。原因は新聞の記事に載っていた通り、白蟻のことだった。どうやら外界から来たもののおかげに白蟻が紛れ込んでいたらしく、もの見事に家が食われてしまった。

「これじゃあいつ壊れるかわかったものではないな。」

とりあえず『近寄るな。危険!』という看板を立てておいた。

「これでよし、と。」

すると向こうから物凄い轟音が鳴り響いてきた。

「ん？」

咄嗟に音のした方向を向いた。

突如、香霖堂が爆破した。

「……………」

爆風で霖之助のメガネが吹っ飛び、髪の毛が逆立った。

「やばい! まじでやばい!!!」

その真横をソラは猛スピードで通り過ぎた。

「きやはははは!!! 待ってよ、もうちょっと楽しく遊ぼうよお兄ちゃん」

2人が通りすぎた後、天子が息を切らして走ってきた。

「ちょ……。ま……。早い……!」

そしてゆっくりと天子も通り過ぎていった。

霖ノ助はただ一筋の涙を流すばかりであった。

「ねえ、もっと見せてよ! お兄ちゃんが壊れるところみたいよ……」

「！」  
フランはケタケタ笑いながら弾幕を浴びせてくる。

「くっそあ、やっぱ弾幕は出ないかあ……。能力はでないのかなあ……。」

とりあえずソラは後ろ向きで走り出した。

「なあ天子い！！！！普段弾幕ってどうやってだしてんの!？」

「え！？普段って言われても……。普通に出せるんだけど……。」

「まじかー。」

「キヤハハハハハハハハ！」

これ以上はやばい。そう思ったソラはとりあえず逃げようと思った。しかし大量の弾幕が目の前までやってきた。

「うおおおおおおお!？」

吃驚したソラは左手を前に突き出した。

すると突然フランの真横を何かが通り過ぎた。

「……!」

それは天子の目の前にあった。

「え」

突然天子はピチュった。

「お?」

一番驚いたのはソラだった。

なんとフランの周りに空色の弾幕が大量に配置されていたのだ。

「おおおおおおお!!!!」

ソラははしゃいだ。まさか自分が弾幕を出せるとは……。

「おっしゃあ！これでかて」

ソラははしゃぎすぎていたため、目の前にあったフランの弾幕にモロに激突してしまった。

ピチューーン!

「きゃはははははははははは！！勝ったあ！久々だけど勝っちゃったあ！お兄ちゃん壊れたあ」

フランは飛び跳ねて喜んでいる。

「ソ、ソラ！？」

天子は砂煙で見えなくなったソラを探すようにあたりを見回している。

「ああー、まずいよあ。こんな弾幕を一般人が喰らったら大変な事に……。」

「んー、物足りないなあ。ねえ、お姉ちゃん。」

天子は肩をビクつと震わせてフランを見た。

「お姉ちゃんも遊んでみる？」

「え、い、いや……！痛いのは嫌いじゃないけど死ぬのはちょっと……、てか死ねないし！！！」

「ええー、つまらないなあ。お兄ちゃんも壊れちゃったし……。」

フランがその場から帰ろうとすると、突然フランの頭が驚掴みにされた。

「?!！」

フランはその場で固まった。

「試したことが一つだけある。」

声が聞こえた。

「……俺の能力はやっぱり俺にちなんだものだったよ。」

すると砂煙が晴れてきた。

「……お兄ちゃん？」

ソラがにかつと笑いながら一枚の紙をその場に落としたりした。

「俺さ、厨二だから、早速能力名を付けさせてもらおう。」

同時にその紙が地面に落ちた。

(描符「立体的美術」リアルティアート〜)(

と、ソラが唱えた瞬間、紙に描かれたものが飛び出た。

「?!?!?!?!?!」

全員はその場で驚愕した。出てきたのはなんとドデかい弾幕。

「で、でかい!？」

天子は驚いたが、ひとまず逃げようと茂みに隠れた。

フランは目の前の空色の弾幕を見てかすかに笑った。

「・・・綺麗だなあ。お兄ちゃんの弾幕。」

その時、幻想郷が大爆発で揺れた。

「あら、地震かしら？」

幽々子はそれでもニッコリ笑ってお茶とお茶菓子を丁寧に食べ始めた。

「負けちゃったあ。」

フランは地べたにペタンと座って笑っていた。

「いやー、いい勝負だったなあ。」

「ねー。」

天子が駆けつけてきた。

「ちよつと、大丈夫!？」

「おお、天子。いたのか？」

「いたわよ!しかも被弾したし・・・!!!!」

「ソウカソウカー。ゴメンネー。」

「棒読み!」

「はあ、疲れたあ・・・。」

ソラは頭をかいた。

「あ。」

今まで忘れていた事を思い出した。

「やべ、忘れてた。帽子帽子!」

ソラは走り出した。

「あれ、どこいくの?」

フランはソラに聞いた。

「帽子落としちゃったんだよ！それ探すために歩いてたんだ！」  
「へえー。」

するとフランはあることを思いついてにんまりと笑った。

「えへへー。」

フランは立ち上がってソラに向かってジャンプした。

「ん？」

ソラは後ろをみると、フランが目の前まできていた。

「!？」

そしてフランが肩にのって、肩車してきた。

「ぬぐを!？」

フランは悪戯に笑っている。

「へへへー。負けちゃったから帽子探すの手伝ってあげるよ」

「手伝ってくれるのか？」

「うん！」

ソラは顎に手を添えた。

(・・・手伝ってくれるのはすげー嬉しいんだが・・・)

ソラはフランを見た。

(・・・フランを肩車って、明らか大きい子供達にぶち殺される気が・・・)

「お兄ちゃん、重くない？」

「あ、ああ・・・。」

「よかったあ。じゃあ早速いこー！」

ソラは仕方なく歩き出した。

「ほら、天子。いくぞー！」

ソラは天子を引きずった。

「あん、ちよ・・・痛い／＼／」

「ほんとにいいのか？霊夢。」

霊夢は神社の外を掃除していた。

「いいのよ。どうせくだらないことだろうし、それに何かあったら動きだせばいいわ。まあ、誰かが倒れたり、お賽銭に誰かがお金入れば私自身が動くかもねー。」

「それってテコでも動かないってことかよ。」

アリスは心配している魔理沙の服を引つ張った。

「心配ないわよ、魔理沙。何かあれば動くんだし、私たちが確認してくればいいわ。」

「……まあ、そうだな。それじゃあ霊夢、またな。」

魔理沙とアリスは飛んでいった。

「……ふん。」

霊夢はお賽銭箱を見つめた。

「はぁ……。」

ソラは息を切らしていた。

「はぁ……。はぁ……。フラン……！」

「お兄ちゃん、どう？」

「やめ……。！も、もう……。無理、だ……。！」

「うふふ……。苦しがつてるお兄ちゃんかわいいなあ……。」

「や、やめる！それ以上は……。もう……。！」

ソラの肩から血が流れ始めた。

「もうそれ以上足バタつかせて肩かけたら俺の肩ぶっ壊れる……！」

頼むから止めてえええ……！」

「きゃはははは」

しかしおろすわけにもいかなかった。さっきおろそうとしたら悲しそうな目で見えてくるんだもの……。おろすにおろせない……。

「……はぁ。」

突然視界に影が入ってきた。

「お？」

ソラは空を見上げた。ギャグじゃないぞ。

空には2つの影が見えた。

「なんだあれ？」

「日傘差してるからわからない！」

「箒だから、きっと魔理沙ね。」

「ほお。」

ソラは呟いた。

「ああー、帽子のことしつてないかなあ。」

天子は疑問に思つてソラに聞いてみた。

「そんなに大切な帽子なわけ？」

ソラは必死な形相になった。

「当たり前だろう。あれは猫好き、というか動物好きな俺が大切に作つたものだ！愛情の籠つた、素晴らしいものなんだ！ていうかこの帽子を色んな奴にかぶせたい！」

するとフランが喋りかけてきた。

「じゃあ私がかぶつてあげる！」

「フランはいい子だなー」

天子は息をつまらせた後、強気な顔をして独り言のようにいった。

「うぐつ……。わ、私だつてえ、総領娘だし、かぶればちよつとは様になるのよ？まあ、そんなへんなものかぶるわけではないんだけどー、もしソラがかぶつてもいいつて言うのならかぶつてあげても」

「ああ。あとで恥という名の帽子をかぶせてやるか……。」

ソラは本当に小さい声で喋った。

「え、なに？」

「いや、なんでもない。」

ソラはため息をついた。

「……いつになったら帽子みつかるとかなあ？」

「歩いてれば見つかるでしょ？」

「いや、だって幻想郷広いし……。帽子に足がついてるわけでもないしさー。」

ソラたちは角を曲がった。

「どうどう？かわいいでしょー！」

そこにはソラの帽子をかぶったチルノが居た。

「う、うん。可愛いけど、それどうしたの？」

大妖精は困り顔でたずねた。

「生け捕った！」

「生け捕っちゃったの!？」

その周りにはリグルや橙やルーミアが居た。

「。。。。。」

ソラは渋い顔でチルノ達を見ていた。そして天子がポツリと呟いた。

「足がついた、というか……。馬鹿がついたわね。」

「ねー。」

ソラはため息をついた。

「まあ、いいや。」

ソラはチルノ達に近づいた。

「この猫かわいいから私のペットにする！」

「大丈夫なの？それ誰かの落し物なんじゃ。。。。。」

「大丈夫なのかー？」

チルノは明るく笑っている。

「大丈夫大丈夫！相手が取り返しに来てもあたいが倒してやる！」

「よし、早速返せ。」

そういつてソラはチルノの服を掴んで持ち上げた。

「!？」

チルノはおろか、周りの皆がソラを見て驚いた。

「だ、だれ?!」

大妖精は少しだけ退いた。

「ああ、ごめんね。この帽子の持ち主。取り返しに来た。」

「そ、そうなんですか？」

リグルは帽子をみた。

「ううー、誰だー！放せー！！！」

「放して欲しかったら帽子を返せ。」

「いやだー！これはあたいが見つけたからあたいんだー！」

「俺のだよ。裏に名前描いてあるし。ソラって。」

大妖精は帽子の裏をみた。そこには小さい文字でしっかりと『ソラ』と書かれていた。

「……。」

チルノは不満そうな顔でソラと帽子を交互に見た。そして勢いよく帽子をソラの顔近くにずいっと近づけてきた。多分返してくれるという証拠なのだろう。

「サンキューな。チルノ。」

チルノは残念そうな顔をして、涙目になっている。なるほど、ロリコンはこれを見て生まれるのか。

「あの、」

大妖精がかたりかけてきた。

「ん？」

「なんでチルノちゃんの名前を知ってるんですか？あなた、ここらへんの人じゃないですよね？」

ああ、そういえばこっちのやつらは俺を全く知らないのか。

「ああ、そうだよ。俺ちよーっと遠くから来たんだ。」

「遠くから来たなら、なんでチルノちゃんの……。」

「チルノだけじゃないぞ。お前が大妖精で、こっちがリグル。あつちの俺見て目を輝かせてるのはルーミア。あつちの猫耳は橙だろ？みんなは驚いている。すると何かに気がついたのか、橙が声をあげた。」

「あ、ひよつとしてあのおっきな爆発音の人？」

「正解。よく出来たなー、ご褒美に飴ちゃんあげちゃう。」

「わーい」



「うあああああ！あたい馬鹿になっちゃっつっつっつー！」  
するとソラはチルノの頭をなでた。

「なら丁度いい解決方法があるぞ。」

「か、かいけつほうほう!？」

「そうだ、もしこれを受ければ、チルノは帽子をかぶっても最強で天才のままだ。」

「おおー！教えて教えて！」

「俺たちが親友になればいい！」

「なるほど！」

チルノとソラは握手を交わした。

「・・・なんだこれ。」

リグルは平然とその光景を眺めていた。

「つまり、そのスキマに入ってこっちに来ちゃった可能性があるってことですか？」

ソラたちはその場に座り込んで話していた。

「ああ。ちよつと蜂に驚いてな。それで足滑らせてすっぱりだ。」

「じゃあ、やつぱりスキマ妖怪の紫さんに聞くのが一番なんじゃ。」

大妖精はソラにそういつてみた。

「それもいいんだけど、今はこの辺り探索してみたいしなあ。」

すると橙がこちらにかたりかけてきた。

「じゃあ、飴くれたお礼に、私が藍しゃまに聞いてみます。」

「おお、それは嬉しい限りだ。」

嬉しくなった橙は素早く八雲家に走っていった。

「あとは、博麗の巫女さんに聞いてみるのはどうですか？」

「霊夢のことか？」

「はい、あの人も結界を操ってますし、何か知ってるかも。」

「そうだな。ちよつくら行ってくるか。行くぞ、フラン。天子。」

するとフランが肩から降りた。

「？」

「ヤツパリ無断で出てきたのは流石にまずいかなって思ったから、一回戻って美鈴に家出してくるって伝えてくるね！」  
フランも素早く走っていった。

「ふむ……。」

とりあえず見送り、ソラは博麗神社に向かおうとした。

「ソラー！」

今度はチルノに呼び止められた。

「今度はなんだ？」

「次は帽子を貸してよ！あたい待ってるからね！」

正直、この帽子はあまり人の手には貸したくないのだが……、

「ああ、じゃあ俺たちの身に何か起こったら、この帽子を貸すから、守り通してくれよ。」

と、ありもしないことを言っただけでその場を離れた。

「なあ、天子。こっちに俺がきたことで何か支障はあるのか？」

天子は引つ張られながら考え込んだ。

「こっちに来たからって？んー、別に問題を起こさなきゃ大丈夫なんじゃない？第一ソラの能力はさっきの吸血鬼の妹にやったのだけでしょ？」

「ああ。」

「あれは別に幻想郷自体に支障をきたすものじゃなさそうだし、いいんじゃないかしら？」

「ならいいんだが。」

「今日はなんだか楽しいことになりそうだなあー」

フランはニコニコ笑いながら紅魔館へと向かっていた。

「外に出たのは久しぶりだったけど、やっぱり楽しいな。お姉様には悪いけど、もうちょっと外の世界を楽しまなきゃ。」

テンションをあげて飛んでいると、顔面に何かが当たった。

「痛っ！」

それに気を取られて、体制を崩してしまった。

「あ……！」

フランは見事に地面に尻もちをついてしまった。

「いったあ……！」

フランはその場で悶絶し始めた。

「な、なんなのよオ……。」

あたりを見回したがなにもない。きつと鳥にぶつかったのだろう。

「……ん？」

スカートを見た。スカートは真っ黒な液体で汚れていた。

「な、なにこれ?!」

フランは気持ち悪そうな顔をした。するとフランは真横に転がって  
るビンに目が行った。

「……これにはいったのかしら？」

流石に怪しい液体は気持ち悪いので、そうそうに帰って替えの服を  
用意してもらおうと思ったフランは急いで紅魔館へと向かっていっ  
た。

突然、かすかに残っていた薬が、煙状になって、そして消えてい  
った。

「お、ここだここだ。」

ソラと天子は博麗神社の石段の真下に来ていた。

「なげー。上りきれるかな？」

「あたしここ上るのはきついわー。」

「じゃあここで待つてる。ちよつと話してみる。」

ソラは天子をおいて石段を登り始めた。

「え、行っちゃうの？」

天子の呼びかけを無視し、ソラは早々と石段に足をつけていった。

半分あたりで息が切れ始め、汗の流れてきた。

「ぜえ……。ぜえ……。こりや流石にきついな。久能山東照宮並だ……。」

それでもソラは博霊神社をみたいがために諦めなかった。

ようやく鳥居が見えてきた。

「おー！」

まるで希望を見つけたかのようにソラはスピードを速めた。帽子が飛ばないようにしっかりと押さえ、そしてやっと鳥居の真下に到着した。

「やったあー！」

汗を拭つてあたりを見回した。

「はあ……。はあ……。誰もいないな。」

あたりは誰もおらず、静かな風の音と鳥の鳴き声しか聞こえなかった。

「……。留守？」

あたりをキョロキョロしながら博霊神社の賽銭箱の前に立った。

「ふむ……。もつと賑やかなものかと思つてたけど、やっぱりちよつとは違うものなのか？」

見回しがてら、賽銭箱の中身を覗いた。

「うわ……。原作どおりすつからかん……。閑古鳥が鳴いてるぞこれ……。」

こりや霊夢もお賽銭を求めるわけだ、としみじみと思った。

「……。まあ、こんな機械滅多にないし、原作とおなじ1470円を賽銭箱に入れてやろう。どうせ全部揃えてるし。」

そついつて鼻歌を歌いながらお札と小銭を持って賽銭箱に投入した。

「ま、これでちよつとはご利益も・・・って、」  
ソラは財布の中身をみた。

「ああ、しまった！千円と1万円間違えて入れちまった！」  
焦ったソラは賽銭箱の中身を覗き込んだ。

「も、もうとれねえか？」

コレでは届かない、と観念したソラはその場で鈴を鳴らして両手を合わせた。

「仕方ないか・・・。」

ソラは何か御利益があることを信じて必死に願い事をした。

『えーっと、漫画家になれますように。できれば最初の一万円札が帰ってきますように。』

ソラはかすかに声をあげた。

「えーっと、それからー、」

突然真横から何か乾いた音が地面に落ちる音がした。

「ん？」

ソラの視線の先に、驚いたような顔をしているようにも見える霊夢が立っていた。足元には箒。多分この音だろう。

「あ・・・。」

流石にまずいと思った。見ず知らずの人間がこんなところにやってきてこんなことをしているのは流石に怪しい。

「や、違う！これは、えっと、その・・・！」

どうにか言い訳をしようと焦っていたら、霊夢が足早に近づいてきた。

「ひっ！」

その場を逃げようとしたら手を引っ張られた。

「なあ！」

そしてなぜか抱き寄せられた。

「へ……。」

霊夢は物凄く嬉しそうな顔をした。

「あなた、あなた最高!!!!まさか、あたしの神社のお賽銭箱に1万470円を入れてくれる最高な人がいたなんて!!!!」

霊夢はソラを抱きかかえたまま飛び跳ねた。

「もう、お茶と羊羹と夕飯しか出せないけど寄っていきなさい」

「え、えええええ!!!!」

ソラはそのまま博麗神社へと引き寄せられていった。

## 微かな異変

フランはこそこそと紅魔館の門前に来ていた。辺りにレミリアや咲夜が居ない事を確認した。

「よし、ちよつと美鈴に報告しなきゃ。」

フランは門の前に立っている美鈴に近づこうとした。

「美鈴！」

咄嗟に聞こえた声に反応したフランはすぐに隠れた。

「はい、どうしました？お嬢様。」

美鈴に近づいてきたのはレミリア。

『オ、お姉様！？』

見るからに怒っている。

「いい、ひよつとしたらフランが帰ってくるかもしれないから、そのときは捕まえて私のところにつれてきなさい。」

「妹様をですか？ひよつとして逃げ出しちゃったんですか？」

「そう。あなたはよくフランに遊んでもらってるから多少は仲が良いでしようし、ひよつとしたら貴女を味方につけるかもしれないから、最初に言っておくわ。フランを見かけたら捕まえてつれてきなさい。」

美鈴は困った顔をしている。

「はぁ……。でも、それは可哀相なんじゃ……。最近はかなり暇でしたし、ちよつとは妹様にも休息を与えたほうが……。」「さすが美鈴。私のことをよくわかっていてくれる！と喜んでいて、と、」

「あの子はハメを外すと大変な事をしてしまうに違いないわ！そしてたらグチグチ言われるのは私なのよ？だったらその前に問題を起こさせなくするわ！」

姉としての威厳があるのか、やはりそういつのは許せないらしい。

「で、でも……。」

戸惑っている美鈴を駒にするようにレミリアは言った。

「もし捕まえてつれてきたら、今までインスタントお味噌汁と普通の海苔とインスタントご飯だけだったのが、咲夜の温かい手作り料理になるでしょうね。」

美鈴は拳を握り締めた。

「お任せ下さいお嬢様！」

フランはその場でずっこけた。

「め、めいりーん……。」

もう館内には味方はいなくなった。これでは帰れない。

「……。」

いや、事実見方はいる。今日会ったお兄ちゃんだ。私を倒したほどの強さなら、きつとお姉さまにも……。

そう思ったフランは紅魔館を離れた。

もつと楽しみたい。もつとみんなと遊びたい。そんな思いしかなかった。あの暗い地下牢はいいものではない。もつと広い、明るい、そんな楽しい世界を見たい。

「私は、もつと……！」

「まあ、よろしくね。ちゅうご……、美鈴。」

「ちょ……。まあ、分かりました。」

「私は今から出かけてくるから。」

「あれ？どこか行くんですか？」

レミリアは少しだけ顔を紅くしている。

「う、うん。ちょっと霊夢の所に……。」

美鈴は少しだけ困った感じで笑っている。

「

「そ、そうですか。お気をつけて……。」

「

「ええ。じゃあ行ってくるわね、めいり・・・中国。」

「なんで言い返したんですか！言い返す必要なかったじゃん！！！」  
レミリアはそのまま博麗神社へと向かっていった。

「はぁ・・・。また咲夜さんがストレスをぶつけて来るんだよなあ。」

「一旦庭の手入れをしてこようと門から屋敷内に入ろうとすると、」

「おじょうさば・・・。」  
思いがけず、涙で顔をぐしょぐしょにしている咲夜に出会ってしまった。

「ひゃうあぁっ！さ、咲夜さん！？」

「な、なんでれいむどどころにいぐときはたのじぞうなんですがあ  
（な、なんでれいむのところに行くときはたのしそうなんですなあ）  
・・・！」

美鈴は困り気味で笑うしかなかった。

藍は結界のすぐ近くに来ていた。

「うむ、変わりはない、か。」

「てつきりなにか異変が起こっているのではないか、と思ったが・・・。」

「あら、ご苦労様ねえ。」

藍は声をかけられ、後ろを向いた。

「珍しいですね。」

後ろにいたのは幽々子だった。

「結界に異変はなかったようね。」

「ええ。私の思い過ごしでした。しかし、何かが侵入してきたのは確かですが。」

「生ける者かしら？」

「分かりません。動かぬものならどこかに落ちているはずですし、竹林の方に落ちたので探しにいこうとしましたが、迷ってしまうと元も子もないので。」

「そう。紫はどうしたの？」

「それが、侵入してきた者がかなりのスピードを出していたので、それにモロに顔をぶつけてしまい、今は気絶しています。」

幽々子は驚いた顔をしている。

「あら、あの紫がねえ……。」

藍は幽々子を見つめた。

「……今日は半分幽霊はいないんですね。」

「ええ、異変の原因を調べがてら、買い物に行かせたから。」

「あまりこきは使わせないほうがいいですよ。」

「ええ、善処しとくわ。」

幽々子はその場を去ろうとした。

「ああ、そうそう。」

藍は幽々子を見つめた。

「誰のかはわからないけど、危険なオーラは感じるわね。」

「……危険な、オーラ？」

「ええ、かなり微弱だけど。」

「……。」

「貴女も気をつけなさい。貴女の式もまだ未熟。常に目を見張っている事ね。」

「……肝に銘じておきます。」

そのまま幽々子は消えていった。

「咲夜には悪いけど、今日は霊夢の所に泊まっていこうかしらね。フランの事も話したいし。」

レミリアは博麗神社の前に降り立った。

「お賽銭は、まあ別に良いわね。いつものことだし。」

神社に近づいて襖をあげようとした。

「ちよつと待った。」

手をはじかれた。

「!？」

レミリアは目の前を見た。そこにはひんにゆ、もとい、伊吹 萃香がいた。

「あんた、鬼じゃない。」

「あんたも鬼じゃないのさ。」

レミリアは萃香を睨んだ。

「ここに何しにきたの？」

「そりゃ霊夢の所に遊びに来たのさ。」

「奇遇ね。あたしもよ。」

「だったら帰りな。ここはあたしと霊夢の巣だ。」

レミリアは牙をむき出しにして怒りを露にした。

「それはこっちの台詞よ。たかが鬼ごときが吸血鬼にはむかうんじやないわよ。」

萃香もレミリアを睨んだ。

「だったら試してみるかい？鬼と吸血鬼、どっちが強いか。」

二人が攻撃態勢に入ると、中から声が聞こえてきた。

『ほら、もつと食べていいのよ？』

「・・・？」

レミリアと萃香は襖を見つめた。

『いいのか？俺そついうのに目がないよ？』

『見た目はアレだけど、味はすごいものよ？ほら、柔らかいでしょ？』  
レミリアと萃香の目が血走った。

『ああ、確かに。食べごろだな。』

『あんま触らないでよ。』

『ああ、じゃあ早速食べるかな。』

なんだか卑猥な言葉に聞こえたレミリアと萃香は賽銭箱の影に隠れ

た。

「れ、霊夢は誰と何をしてるの!？」

「し、知らないよ!何かお菓子を誰かと食べてるんじゃないか!？」

「あの霊夢が幻想郷の誰かにお菓子を差し出すと思う?お賽銭もないのに……!」

小声で討論し始めた。それでも中から声が聞こえる。二人はそつと聞き耳を立てた。

『あんなにお金をくれたら、もう何もかも差し出すしかないじゃない。』

(な、なにもかも!?)

『そうか。じゃあ剥いていいんだな?』

(む、剥くだと……!?)

『もう、食べてイイよ?』

(や、優しい声で食べてイイだと!?!なにを!?!誰を!?)

『じゃあ、頂くとするか。』

耐え切れなくなったレミリアと萃香は中に突撃した。

「霊夢、早まるなアアアアアアあああああああああああああああ

ああ!?!?!」

「え、何!？」

「お、貧乳鬼コンビ。」

レミリアは牙をむき出しにしてソラに近づいた。

「貴様、あたしの霊夢に何しようとした?」

「え、なにつて……。食べようとしたんだけど。」

萃香は霊夢を背中にやった。

「危なかったね霊夢。駄目だよ、いくらなんでもお金がなかったからってこんなことは……。!」

「あんたら、何言ってるの?」

「殺す!なにがなんでもこの猫男は殺す!?!」

「ああ、途中から来たのなら、多分誤解受けてんのか。」

レミリアはグンニグルをソラの目の前に突きつけた。

「誤解だあ？なんだ、言ってみる。」  
ソラはお茶と柔らかい羊羹を口に含んだ。

「早とちりしてすみませんでした。」

レミリアと萃香はソラと霊夢の前で土下座をしていた。

「全く……。」

霊夢はソラから貰ったお金をお財布にしまった。

「んで、あんた達は何しに来たの？」

「遊びに来ました。」

「帰りなさい。」

レミリアと萃香は同時に顔を挙げた。

「なんでよ!」

「今日のお客はソラだけよ。他のやつらは帰りなさい。」

「ちょ、ちょっと待って!この鬼はあれでも、私はお金を多少持つてるわ!だから、」

霊夢は暗い顔でレミリアを睨んだ。

「今まで無銭飲食しといて今更なにほざいてんだこの吸血鬼は……。」

「」

「うぐ……。」

「霊夢!。あたしは霊夢好きだからいれてよ!。」

「あたしは無銭飲食する鬼は嫌いよ。」

「ちくしょー!」

ソラは困った顔をしてあたりを見回した。

「ま、まあ入れてやるくらいはいいんじゃないのか？」

「……ソラがいうなら、仕方ないわね。」

霊夢は顔を紅くした。

「な……、なんで?なんでソラにはツンデレっぽい一面を見せるの?ていうかデレしかない……。私達長い付き合いじゃない。ね」

え、霊夢・・・、霊夢！」

霊夢はソラとお茶を飲み始めた。

「長い付き合いだったわね。」

レミリアは不意に涙を流した。

「ああ、うああ・・・。うわアアアアアああああああああああああああん！！！霊夢を寝取った罪は重いからなあ！！！！！」  
子供みたいに泣きながら外に飛んでいった。

「いや、寝取つてないんだけどなあ・・・。」

「ま、これにこりたら今度からお賽銭持ってきてなさいっての。」

萃香はまだ残っている。

「いやー、しかし霊夢がこれほど気に入るとはねえ。」

萃香はソラの隣に座った。

「あんた、名前は？」

「ソラだ。」

「お、いい名前だねえ。あたしは、」

「萃香、だろ？」

「あれ、知ってるの？」

「ああ。」

「なら話が早いね。霊夢のお気に入りは私のお気に入りで。今後ともよろしく。まあ飲みなよ。」

「いや、俺酒が飲めないんだよね。」

「あれ、苦手？」

「いや、未成年。」

萃香は不思議そうな顔をした。

「・・・人里から来たのかい？」

「いや、外の世界から。」

「ふーん・・・。」

「ま、いいでしょそんなことは。」

霊夢は会話を断ち切った。

「それより、ソラ。今日の夕飯なにがいい？」





## 幻想郷の夜

「今日、不思議な青年に会った？」

上白沢 慧音はお茶を汲みながら妹紅の話を聞いた。

「うん。ほら、お昼頃変な爆発音なつたでしょ？その原因の人。」

「ああ、あの爆発音か。それで、一体なにを話したんだ？」

「少し話した後、めっちゃ怖い顔で永遠亭の兎を追いかけた。」

「一体てゐは何をしたんだ……。」

「とりあえず、何か怒らせたんだろ。」

妹紅は外を見た。

「それより、今日呼んだ理由は？」

「ああ、忘れていた。実は一緒に夕飯をと思ってな。」

「一緒に夕飯を？」

妹紅はきよとんとした。

「ああ、どうやらミスティアがいい酒を手に入れたみたいでな。時

にはいい気分酔うのもいいとおもってな。」

「なるほど。確かにいいかもね。」

2人は外に出た。

「しかし、その青年には興味があるな。」

「興味？」

「ああ。不思議な能力や特技を持つてるみたいだし、それに……、

」

慧音は少しだけ顔を暗くした。

「あまり人を近づけない妹紅と仲良く出来たのも気になるし……

」

「なんか言った？」

咄嗟に妹紅からそんなことを言われ、慧音は顔を少し紅くした。

「い、いや、なんでもない！」

てくてくと薄暗い夜道を歩いていくと、目線の先に一つの淡い光が

見えた。

「お、あつたあつた。」

目的のミステリアの屋台についた。

「あ、いらっしやい！」

ミステリア・ローレイは明るい笑顔で妹紅達を迎えた。

「今日は久々にお酒をと思つてな。」

慧音と妹紅はのれんをくぐった。

「皆目的は一緒みたいですねー。」

目的？と疑問に思うと、真横から声が聞こえてきた。

「あら、慧音じゃない。」

慧音達は真横を見た。

「霊夢じゃないか。」

「貴方達もお酒目当て？」

「ああ。」

「分け前が減っちゃうわねー。」

霊夢は不機嫌そうにおでんを食べている。

「相変わらずだな。ところで、一体どんなお酒を仕入れたんだ？」

「ああ、えつとですね、」

ミステリアは足元を探つてとつくりを取り出した。

「これです。焼酎。純度高いですよお。」

嬉しくなったミステリアは妹紅達の前に猪口をおいて、ゆっくりと焼酎を注いだ。

「みて下さいよ、この透明感！透き通つた飲みやすさと深い味わい！手に入れるの難しかったですよー。」

「おお、凄いな！」

慧音は久々に感じる酒のさわやかな香りを堪能し、一口で焼酎を飲んだ。

「ん……。すごいな。本当に飲みやすい。」

「本当だ、いい酒仕入れたなあ、ミステリア。」

すると横から霊夢が会話に介入してきた。

「……でも、そのいい酒を悪くする飲み方してる鬼がいるんだけどね。」

全員が一斉にその問題の方向を見た。

「もつと酒もつてこおおい……!!!!」

萃香が焼酎を美味そうにがぶ飲みしている。萃香の足元には焼酎が入っていたであろうとつくりが何十本も転がっていた。

「なんとというか、霊夢もよくつるめるな……。」

「慣れれば面白いわよ。」

と、慧音たちと他愛のない会話をしていた。

「よじつと。」

ミステリアがお皿に色々な具材を入れ、奥のほうへと向かっていった。

「？」

すると奥からミステリアの声が聞こえてきた。

『お待ちせしました！。』

『おお、サンキューな。』

誰か入るのか？と妹紅と慧音が奥を覗き込んだ。

「？……魔理沙？」

黒い帽子が見える。明らかに魔理沙の帽子だ。しかし見るからに青い顔をしている。

すると霊夢が落ち着いた顔で慧音達に言った。

「ああ、向こうにはあまり行かない方がいいわよ。ま、止めはしないけど。」

「……？」

気になって仕方がない慧音達はそろそろ店の奥に進んだ。

「なになに……？」

すると目の前にオレンジ色の猫耳の付いた帽子が目にはいった。

「……!!？」

次の瞬間、慧音達は驚愕した。

ソラがおでんを食べていた。机の上で。しかし驚いたのはそこじやなかった。問題は座っている椅子のほう。

椅子が明らかに人だった。しかもその正体は顔を紅潮させて息を荒げている天子だった。

「な、なんだこれ!？」

慧音は吃驚して退いてしまった。

「ソ、ソラー!？」

その声に気付いたソラは慧音達のほうを見た。

「おお、妹紅!また会ったな!」

「あ、ああ……。」

すると天子がか細い声をあげた。

「ソ、ソラあ……。重い、すつごく重いし、膝の甲に砂利が刺さつて痛い……。なんか、すつごいおかしい気分なんだけど……  
／／／」

「そうか。じゃあもつと頑張れるようにおでんをあげようじゃないか。」

ソラは箸でおでんの具をつまんだ。

「はい、がんも。」

そして思いきりがんもを顔面に当てた。

「はうああっ……。あ、熱いいいいい……。／／／／／／／」

「はっはっは……。」

ソラは嬉しそうに微笑を浮かべている。

「……妹紅。この幽香そっくりな青年が、お昼頃会った不思議な青年、か?」

「……うん。」

「ほお、外の世界、から?」

「ああ。ちよいとスキマに吸いこまれてこっちの世界、にな。」

慧音はほろ酔い気分でソラに話しかけた。

「てことは、何か色々知識はあるのだろう？外の世界がどんなのか聞かせてはくれないか？」

ソラは色々思い当たる事を言葉にした。

「うーん、例えば……。広い道を機械が物凄いスピードで走り抜けたら、空を飛ぶ大きな鉄の塊があったり、飛び出して見えるテレビがあったり、まあ便利だけど、あまり面白みはないよ？幻想郷の住人みたいに皆能力を持ってないし、犯罪はけっこう起こるし。」

慧音は唸り声をあげた。

「なるほど……。私の知らない事も多いのだな。勉強になった。

さあ、飲みなさい。」

慧音はソラにお酌をしようとした。

「ああ、いいですいいです。俺、酒飲めないんで。」

霊夢は驚いた。

「あれ、ソラお酒飲めないの？」

「飲めないっていうか、俺まだ未成年だし……。」

その言葉を聞いた皆が首をかしげた。

「……未成年？」

「……。ああ、幻想郷の奴ら絶対に10代の奴とかいねえよな。えつとですね、未成年っていうのは、まだ大人になりきっていない人をさす言葉で、お酒とか飲めない決まりになってるんですよ。」

すると萃香が驚いてソラに近づいてきた。

「そ、そうなの！？じゃ、じゃあそっちの世界の未成年っていう人たちはお酒を飲めないのかい！？」

「飲めないっていうか、大体の人は吞んでませんよ。少し危険な領域に入り込みたい奴らは飲んだりしますけど。」

「なんだあ、もったいないなあ。」

「ほんと、もったいないわね。」

後ろから声が聞こえてきた。皆は咄嗟に後ろを向いた。

そこにいたのは幽々子だった。

「あら、幽々子じゃない。貴女もお酒？」

「お酒も良いけど、夜雀の作る料理も楽しみなのよね。妖夢、座つていいわよ。」

「いえ、私は立っています。」

「いいから、私の隣に座りなさい。」

強引に妖夢は引つ張られ、隣に座らされた。

「あ、は・・・はい。」

妖夢は照れながら幽々子にぴったりくっついた。

「夜雀ちゃん。うな重頂戴。それと新しいお酒も忘れずにね。」

「はい。」

幽々子の前に焼酎がおかれた。

「・・・あなたね。幻想郷に入り込んできた人は。」

ソラはゆっくりと幽々子のほうを見た。

「・・・ええ。」

「カワイイ帽子ねえ。妖夢にかぶせていい？」

「え、ちょ・・・、幽々子様!？」

「もちろんですとも。ていうかかぶらせてください。」

「勝手に決めないでください!」

妖夢はネコ帽をかぶらされた。それからずっと妖夢はてれたまま顔を俯かせている。

「カワイイなこん畜生。」

ソラは小声で言った。

「でしょう。妖夢はかわいんだから。」

幽々子は愛でるように妖夢に頬ずりした。

皆が美味しい酒のおかげでほろ酔い気分になって来た。月明りがあたりを照らす中、ミステリアの屋台の周りは盛り上がっていた。わいわいがやがやと酒を飲んだり、会話を楽しんだりした。

特にソラは幻想郷に来たという高揚感からテンションが上がっていた。妹紅に会ったり、天子に会ったり、現実ではありえないことが起こったことがとても嬉しかった。厨二病の彼が能力を手に入れ、実際にフランと戦ったことが、心が跳ねるくらい嬉しかったのだ。想像以上だった。幻想郷の住人は皆優しく、心が温かい。初めて出会ったこんな俺でも温かく迎えてくれた。やはり日常とは大きく違った最高の場所だった。

「しかし……。」

魔理沙がむりやり萃香に焼酎を一気飲みさせられ、ソラの後ろでぶっ倒れ、幽々子はミスティアを食べようとし、霊夢はかなり酔って慧音と妹紅にグチを零し、天子は顔を紅潮させながら息を荒げている。

あまりにも可笑しな光景だが、これはコレで面白い。自然に笑いがこみ上げてくるほどだ。

「おい天子。どうした？」

魔理沙がふらふらな状態で天子に話しかけた。ソラは天子達のほうを見た。

「んー、別に。ただ砂利に足を付けすぎたせいで傷がついちゃって……。」

「大丈夫かよ。」

「大丈夫よ。痛いけど別に支障はないし。」

天子が自慢げに話している。それを見たソラはミスティアに話しかけた。

「ミスティア。ちょっと焼酎頂戴。」

「あれ、飲めなかったんじゃないですか？」

「別のことに使っただよ。」

純度の高い焼酎を手にとったソラは天子に話しかけた。

「天子、膝だせ、膝。」

天子はきよとんとした。

「え、な……なんで？」



霊夢と萃香を持ち上げた。

「ほら、そろそろ帰るぞ。」

霊夢と萃香はええー、と不満を零した。

「あんま飲みすぎると馬鹿になるぞ。」

それを聞いた幽々子も、

「そうね。私たちもそろそろおいとましましょうか。」

幽々子はミスティアに言った。

「夜雀ちゃん。焼酎を何本かお土産にちょうだいな。あと食べ物もね。」

「あ、はい。」

ミスティアは支度をした。

「まだ飲み続けるんですか？」

「明日からよ。心配ないわ。」

妖夢はため息を吐いてお土産の袋を手を取った。

「それじゃあ、皆も気をつけなさいね。」

幽々子が飛び立とうとした時、不意にこっちをむいた。

「ソラ、って言ったかしら？」

ソラは呼び止められて幽々子のほうをみた。

「なんですか？」

「ここに来たというのなら、思う存分楽しんでいきなさい。でも、幽々子は微笑を浮かべた。

「おいたは、しちゃだめよ？」

そういつて幽々子達は宙に浮き、消えていった。

「・・・おいた、ねえ。」

ソラは霊夢と萃香を引っ張りがてら声をあげた。

「じゃあ俺たちは帰るわー。霊夢に泊まってくって約束しちゃったし。」

ソラは振り向いて妹紅に言った。

「また明日そっちに遊びにくよ。またな。」

霊夢はソラにグチを零している。

「うがー、まだ飲み足りないぞー！」

「はいはい、あとでフルーティなものでも作ってやるから。」

「なんか、すごいやつだったな。」

慧音は驚きの声をあげていた。

「うん……。」

妹紅と魔理沙は同時に頷いた。

「ところで、」

魔理沙は奥のほうを見た。

「ソラが、私を……心配……。えへへへ」

「このDMどうする？」

周りにいた慧音達が同時に言った。

「放置しておけ。」

妖怪の山の頂上。そこには守矢神社がある。夜と言つのもあり、

流石に静かだった。

しかし中ではこんな会話が繰り広げられていた。

「この焼酎、流石だね。」

八坂 神奈子はいいい気分の中焼酎を飲んでいる。

「そうだねえ、神奈子。」

その隣では守矢 諏訪子が無邪気に焼酎を飲んでいた。

「しかし、今日はなんだか不思議なことがあったねえ。あの爆発音、外から来た人なんだってよ。」

「え？ そうなの？」

「今霊夢の所にいるみたいだね。烏天狗が取材につて張り切ってた

よ。」

「へえー。」

「一瞬烏天狗が見に行つて来て、色々教えてくれたよ。どうやらそいつ、かなりの甘党らしい。」

「甘党？」

「甘いものが大好きなやつってこと。」

「へえー、早苗みたい。」

なんて他愛のない会話をしていると、突然外から誰かの疾走する音が聞こえた。

「・・・？」

諏訪子と神奈子は首をかしげた。

「さーて、今は霊夢さんのところにいるとのこと。早速深夜取材です。」

文が飛び立とうとした。

すると後ろから爆走する足音が聞こえてきた。

「あやや？」

文は後ろを向いた。

なぜか後ろからは目を見開いた東風谷 早苗が走ってきていた。

「あややや！？」

早苗が文の前に止まり、文の肩を鷲掴みにした。

「文さん、今すぐ私を霊夢さんの所に連れて行ってください！今すぐ！」

「あややや！？い、いいですが、どうしたんですか？！」

「決まってるじゃないですか！甘いものです！！！」

「へ？！」

文と早苗は博麗神社前に降り立った。

「甘いもの、ですか。確かにその人が甘いもの好きと叫んでいたのは耳にしましたが、それがフルーツ好きにつながりますかね？」

「分かりませんが、私が元いた外の世界にどんなお菓子やフルー

ツがあるのか気になるだけです。」

「目が怖いです。早苗さん。」

早苗は息を荒げながら襖に近づいた。

「ま、まあ……。フルーツが有るとは限らないですし……。第一、私はそこまでフルーツが、大好きなわけじゃ……。い、いや……。大好きですけど、それでも、別に……。ふふふ」

早苗は震える手で襖をあけた。

「お、おじゃまします！」

ソラが声をあげた。

「どうだー。俺が作ったフルーツパフェは。」

霊夢は驚いた顔をした。

「す、すごい。こんな美味しいもの、はじめてかも……。」

萃香も同様の反応をしている。

「すごいなー、こんなもの作れるなんて。」

「だろー。」

早苗は霊夢達が食べているフルーツパフェを黙視した。

そりゃもう綺麗なものだった。ソラは料理自体はかじる程度だが、なぜか甘いものを作るときだけは人一倍凄い力を発揮する。自分の好きなものなら尚更だ。フルーツは何処から出てきたかは聞かないでいただきたい。

「描いたものでも食えるんだな……。」

と、ソラは聞こえないようにぼそりと呟いた。霊夢は無我夢中でパフェを食べながら目の前に立っている早苗をちらみした。

「でも、フルーツだからねー。こんなの早苗がみたらまずいことにならへっ！2Pカラアアアアっ!？」

霊夢は咳き込んだ。早苗は物凄い怖い声で霊夢にたずねた。

「霊夢さん。誰ですか？その綺麗なパフェを作ったというその人は。」

霊夢は慌てた。

「あ、い……。いや！この人は、その……!」

文も遅れて中に入った。

「あやや！その人が幻想郷に入ってきた人ですか！」

「あ、文?!」

早苗は無言で侵入してきて霊夢の手元にあったフルーツパフェを黙視した。

「……。」

無言でスプーンを霊夢から奪い取り、一口掬って口に入れた。

早苗はスプーンを落とした。

「さ、早苗？」

霊夢は早苗の方に触れた。

「……名前は？」

「へ？」

「その人の、名前です。」

早苗はソラを指差した。

「……ソラ、だけど？」

早苗は立ち上がってソラに近づいた。

「え？」

ソラはきよとんとしている。

すると早苗がソラの手を取った。

「はい？」

早苗は半分笑い、半分今にも襲ってきそうな顔をしていた。

「ソラさん、どうです？うちの神社にも来てみませんか……？」

「はい!？」

周りが驚愕した。早苗の手は震えている。

「あのパフェおいし……。じゃなかった。こんな小さな神社より、うちの神社はひろいですよー？」

「ちよつと……。狭いってどういうことよ!」

「貧乏巫女は黙ってて下さい!」

「誰が貧乏貧乳腋巫女よ!」

「霊夢、誰もそんなこと言ってないよ……。」

「うすうす感づいているんでしょう。」

霊夢と早苗は討論しあった。

「大体、あんたにソラを連れて行く権利ないでしょ！ソラは私が面倒見るの！」

「面倒つて……、ご飯作ってもらってるだけじゃないですか！」

「ソラは私のお賽銭箱に1万470円も入れてくれたのよ？大体の人間はあんたの所にお賽銭入れてくけど、ソラだけは私の所に来てくれたわ。こりゃもう嫁に迎えるしかないでしょ！」

「俺は男だ！！！！！」

「こんな歓迎の仕方じゃ誰も喜びません！こっちには美人な神奈子様とめっちゃカワイイ諏訪子様がいるんですよ？ついでに私も付いてきます！」

「あんたはただの2Pカラーでしょうがっ！」

「あなたはただの貧乳腋巫女でしょうがっ！」

「お前ら醜い争いすんな！みてるこっちが悲しくなる！」

ソラは即座にツッコミを入れた。そういつてる間にも霊夢と早苗は取っ組み合いを始めた。

「よこして下さい、フルーツウ！！！」

「帰りなさいこのフルーツデイズが！」

とにかく霊夢達を止めようと周りが動き出すと、突然早苗の頭にチヨップが食らわされた。

「えぐっ?!」

早苗はその場に崩れた。

「？」

皆は早苗の後ろを見た。

「全く……。」

早苗の後ろには神奈子と諏訪子がいた。

「ごめんね、早苗が迷惑かけちゃって。」

神奈子は早苗を引きずった。

「あんたがソラかい。なら、今度うちにも遊びにきな。」  
そういつて神奈子達が帰っていった。

早苗達が帰った後は静けさが蘇った。

「一体なんだったのかしら。」

「さあ？」

少しの間沈黙が続いた。

「・・・ま、早苗最近フルーツ食べてないって言ってたからねえ。」  
霊夢は部屋を移動した。

「あれ、どこいくんだ？」

「お風呂沸かしてくる。」

ソラは驚いた。

「あれ、風呂なんてあったのか？」

「そりゃあるわよ。うちのお風呂けっこう広いのよ。お湯沸かしてくるからちよつと待ってて。」

「ああ。」

ソラは萃香と向き合った。

「なあ萃香。」

「ん、なんだい？」

「その焼酎、何杯目？」

「んーつとね、今飲んでるので、一升瓶8本目くらいかな？」

「おっそろしい・・・。」

## 深夜の幻想郷

永遠亭の薬の貯蔵庫に永琳が立っていた。笑顔で。

しかも永琳の足元にてゐるが体育座りさせられていた。

「……。」

てゐは冷や汗を流している。

「なんでこんなことされてるのかわかつてるわよね？」

「……師匠の、薬を、勝手に持ち出したから。」

てゐはか細い声で答えた。

「そう。貴女が無断で薬を持ち出して、拳句の果てにその薬を転んでぶちまけてしまった。そして今の今まで黙ってたのはいいものの、薬のことを大妖精たちが教えに来てくれたからばれてしまった。」

「……師匠の言うとおりです。」

「今からどうなるかわかるわよね？」

「……多分。」

「言ってみなさい。」

「……お仕置きされます。」

「どんなお仕置きが良いか選ばせてあげるわ。」

永琳は笑顔でいろいろなものを取り出した。

「一日姫の言う事全てをドロワーズとさらしただけ着ながら聞くか、私の薬の実験台になるか、永遠亭の看板になるか。ちなみに看板は外ですつとさらされているからね。」

てゐは冷や汗を流した。

「……どれか選ばなきや駄目？」

「だーめ」

てゐは外でこちらの様子を見ている優曇華と輝夜を見た。

だが優曇華と輝夜は静かに首を振った。その行動を見たてゐは涙を流した。

「ほら、橙。あーん。」

「あーん」

藍と橙は一緒にご飯を食べていた。

「どうだ、美味しいか？橙。」

「はい！とっても美味しいです、藍しゃま！」

「そうかそうかあ。可愛いなあ、橙は」

2人が楽しそうにしてる中、隣の部屋が気になって仕方がなかった。

「・・・紫様、まだ起きないんですね。」

「ああ、けっこう強く頭を打っていたからな。だが問題はそこじゃなくて・・・、」

藍は横目であるモノをみた。

「このスキマが消えないことなんだが・・・。」

問題はスキマだった。紫が気絶した事で、このスキマがずっと発動したままなのだ。

「またなにか別なものが入ってこなければいいのだが・・・。」

色々と考え込んでいる間に橙がご飯を食べ終わった。

「ご馳走様でした！」

「ん、ああ。お粗末様。」

すると橙がポケットから飴玉を取り出した。

「？・・・橙、どうしたんだ？それ。」

「これですか？今日猫帽子をかぶったお兄さんから貰いました！」

「お兄さん？」

橙は説明してみた。

「えつとですね、なんか外の世界から来たって言ってました。爆発音と関係ある、って言ってたような気が・・・。」

それを聞いた藍は驚いた。

「橙、会ったのか！？その男と！」

藍の意外な行動に少しだけ退いてしまった橙だが、

「え、あ……はい。今日の昼頃、遊んでいる時に……。」

「他には……？何か変わったところはなかったか！？」

橙は考え込んだ。

「えーっと……。」

藍は冷や汗を流した。

「あ、そういえば！」

藍は息を呑んだ。

「フランちゃんを肩車してました。すごいなついてましたよ？」

「あの吸血鬼の妹が?!」

改めて幻想入りしてきた者が恐ろしい事に気づいた藍だった。

「総領様！。何処にいるんですかー？」

永江 衣玖はあたりをキョロキョロしながら天子を探していた。

「全く、朝方からいなくなっただかと思えば夜遅くまで一体何をしているのやら……。ぜっぺ……、総領様あ？」

衣玖はミステリアの屋台の近くに来た。

「屋台……。」

衣玖は暖簾をくぐり、ミステリアに話しかけた。

「あのオ、ここらへんに髪が青くて長い、帽子のここらへんに桃が付いた馬鹿みませんでした？」

ミステリアは困った笑顔のまま真横を指差した。

「……？」

衣玖は真横を見た。

「ああ……。変、変な気分なの……。身体がじわじわして、トロンってなってきた、熱くなって、嬉しくなってくる……。この気持ちはなに？なんなの？」

と身悶えしている天子をみて衣玖はため息を吐いた。

「すみません。すぐ連れて帰りますんで。」

衣玖はミステリアにお辞儀をし、天子に近づいた。



フランは少しだけ退いた。

「ほら、怖くないですから。」

「やだ。美鈴も裏切ったもん……。」

美鈴は少し首をかしげた。

「お昼頃、ここに来た。美鈴なら一緒になっってくれるって思ってたのに……。咲夜のご飯に負けて……。」

ああ、と美鈴は引きつった笑顔になった。

「あ、あれは違います！あれはですね、お嬢様の味方のふりをしただけなんです！」

「そ、そうなの……？」

「そうです！」

フランは少しだけ信用を取り戻したみたいだ。美鈴はフランの頭をなでた。

「私も、一緒に謝りに行きますから。さあ、戻りましょう。」

「う、うん！」

フランは笑顔になって美鈴の手を握った。

「あれ、その御尻の真っ黒な汚れ、どうしたんですか？」

「汚れちゃった！」

「泥遊びですか？」

「ううん。お兄ちゃんと遊んでて汚れちゃったの！」

「そのお兄さんつれてきてください。ぶち殺しますから。」

「？」

少し小さな誤解が生まれた。

「ひいつ!？」

ソラは背筋を振るわせた。

「な、なんだ……？今何か凄い勘違いをされぶち殺されそうな感覚におちいった……ような。」

今現在ソラは霊夢が沸かしてくれた風呂にはいつている。

「・・・きつと風だな。窓開けっ放しだし。」  
とりあえず肩までお湯に浸かり、体を温めた。

「しかし、幻想郷に来て尚こんな広い風呂には入れるとは、生きていて良かったなあ。」

ソラは汗を流した。

「ていうか、死んでんじゃねえの？」

一番思っていたことを口に出した。

「・・・ありえる。」

唸り声をあげたソラは天井から差し込む電球の光を見た。

「・・・死んだのなら、せめてさよならくらいは言いたかったよな！。死んだと決まったわけじゃないが。まあ、死んだならこの幻想郷で暮らせばなんら問題はない。とりあえず、ラノベ的展開では誰かが風呂にはいつてきてラッキースケベ！展開になるんだろうが・・・、そんな嬉しい期待はしなくてイイだろう。まあ、天子とかなら入ってきそうだが・・・。あいつほんとに絶壁なんだなあ。」  
へらへらと笑っていると、脱衣所から声が聞こえてきた。

『ソラー。湯加減はどう？』

「ん、ああ。丁度良いぞ。気分がいい。」

『そう。それはよかったわ。』

と機嫌の良さそうな声が聞こえてきた。

『じゃあ、私も今から入るわね。』

「・・・はっ!？」

ソラは霊夢の意外な言葉に奥まで身を引いた。

霊夢はタオルで体を隠したまま入ってきた。なんで!？

「何でって言われても・・・、背中を流しに来たのよ。」

「せ、背中流しといわれても・・・!お、俺男だし!ていうか絵面と文面的にヤバイ!!!来いよアグネス&石原になりそうで!!!」  
「なにいつてんの?」

ソラが慌てているのとは裏腹に霊夢は冷静に近づいてきた。





## そして起こる、幻想郷の異変

「大丈夫ですよ、妹様。」

フランは美鈴の背中に隠れたまま喋ろうともしない。

「……あ、咲夜さん。」

角から出てきた咲夜に話しかけた。

「あら、美鈴。門番の仕事はどうしたの？」

「それどころじゃなくて……。」

「……？」

咲夜は美鈴の背中を見た。

「!!!……い、妹様!?!」

咲夜が声をあげるとフランはビクツとなつて震えた。

「今まで何処いたんですか?心配したんですよ?」

咲夜が優しく心配しても起こられると勘違いしているフランは美鈴の背中で震えていた。

「とにかく、今すぐお嬢様に……!」

「あ、咲夜さん……!」

美鈴が止める間もなく咲夜は時間を止めていつてしまったようだ。

「……。」

美鈴はフランの様子を見た。明らかに怖がっている。

「妹様……。」

美鈴はその場にしゃがみこんでフランを抱き寄せた。

「……!」

「大丈夫です、妹様。私がついてますから。」

フランは小さく頷いて、

「……うん。」

と、か細い声でいった。

数分後にフランと美鈴はレミリアの部屋の前に着いた。

「……。」

美鈴はフランの背中に手を添えた。

「さ、行きましょう。」

美鈴はドアをノックした。

『……入りなさい。』

と、レミリアの声が聞こえた。

「……。」

フランは覚束ない足取りで前に進み、ゆっくりと重たいドアを開けた。

「……失礼します。」

美鈴は頭を下げた。

レミリアは椅子に座っていた。その様子を見たフランは一步だけ下がった。

「……妹さ」

「フラン、こっちに来なさい。」

フランは肩を振るわせた。どうやら動けだせないらしい。

「行きましょう、妹様。」

一緒に行こうとするとレミリアが声をあげた。

「美鈴はそこにいなさい。」

そっぴわれた美鈴は足を止めた。

「……。」

フランは意を決したのか、一步一步重い足を運んだ。

数秒後にレミリアの椅子の前についた。レミリアは無表情で前を見つめている。

「…………め……なさい。」

フランは小声で何かを言った。レミリアは反応はしていない。

「……ごめん、なさい。お姉様。」

レミリアは音を立ててその場に立ち上がった。フランは吃驚してスカート裾を握り締めた。

するとフランがこちらを向いた。

「……?」

フランは上目遣いでレミリアを見つめた。

次の瞬間、フランはレミリアに頬を叩かれた。

「っ……!!!!」

「妹様……!」

フランはその場に倒れた。美鈴は駆け寄ってフランを抱き起こした。

「……どれだけ心配かければ気が済む訳?」

レミリアは怒りをあらわにしてフランに言った。

「ただでさえ太陽の光に弱いのに、あなたはどれだけ馬鹿なことをしたのよ!勝手に家を出て、なにか変な爆発音が響いた中外で遊んできた?ふざけるんじゃないわよッ!!危ない事くらいあなたでもわかるでしょ!」

レミリアの怒鳴り声を聞きつけたのか、咲夜とパチュリーが部屋に入ってきた。

「少しはこっちの身にもなりなさい!もう貴女の我儘わがままは聞きたくもないわ!今すぐ部屋に戻りなさい!今すぐ!!!」

レミリアはそのまま部屋を出て行ってしまった。

「ちよつと、レミィ!?!」

パチュリーはレミリアを追いかけていった。美鈴はそれを見送った後、フランを見た。

「大丈夫ですか?妹様。」

フランは頬を押さえたまま動こうとしなかった。

「今すぐ、頬を冷やさなきゃ……。」

その場を動こうとすると、フランが突然動き出して美鈴を突き飛ばした。

「っ??!」

美鈴はその場に倒れた。フランは物凄いスピードで部屋を出た。

「妹様!？」

美鈴はすぐ起き上がり、部屋を出て追いかけてようとした。

しかしフランはもうその場にいなかった。

「妹様……。」

美鈴はその場に立ち尽くしていた。

フランは既に外に出ていた。門を出て、茂みの中を突き進んでいった。

「ごめんなさい……。ごめんなさい……。」

フランは眼から涙を流した。

「ごめ……。なさ……。ゴメ、うあ……。うああああああああああん!!!」

フランは大声をあげて泣きながら走った。無我夢中で林の中を駆け抜け、行くあてもない道を突き進んだ。

なぜ外に出してしまったのか分からない。外に出ても迷惑をかけるだけなのに、怒らせてしまっただけなのに、何故外に出してしまったのかが分からない。

きつと、レミリアにもう顔を見せたくなかった。そう思ったからだろう。あんなに怒ったレミリアの顔をフランは今まで見たことがないからだ。あんなに怒りを露にした顔。それでいて、悲しそうだった顔。それがみたくなかった。そして、自分の情けない姿を、レミリアにこれ以上見せたくなかったのだ。

「フランは石に足を躓かせて転んでしまった。」

「あぐつ……。!!!」

派手に転んでしまい膝やふくらはぎに傷が出来てしまった。

「い、痛い……。」

フランは起き上がれなかった。痛くて、悲しくて、虚しくて、体に入らなかつた。

「・・・うつ。」

また涙がこぼれてきた。もうこれ以上、迷惑はかけられない。そう思えてきた。

「・・・帰ろう。」

不意にそんな言葉が出てきた。

「帰って・・・お姉様にもう一度謝ろう。」

それくらいしか出来なかった。今の自分には、コレくらいしか出来ない。そう悟った。フランは怪我をした足を押さえて起き上がるうとした。

突然目の前に、黒い煙のようなものが見えた。

「・・・？」

フランはすぐ気がついてあたりを見回した。

その黒い煙はフランの周りだけを覆っていた。

「なに、これ・・・？」

あとをたどってみた。しかしそれはすぐ近くから発生していた。

スカートの黒く汚れた部分から煙が発生していたのだ。

「・・・？」

思い出した。この黒い汚れは、帰ろうとしたときにバランスを崩して地面に落ち、その時ついたものだ。

「な、なんなのこれ？」

その黒い煙はとてつもなく嫌気の差す匂いを放っていた。しかもどんどん煙の量が増えている。

「げほっ・・・！うえ、えほっ・・・！！！！」

フランは手デ煙を扇いだ。それでもその煙はまとわりつくようにフランの周りを囲っている。

「っ・・・！？」

フランは足元に違和感を覚えた。恐る恐るみてみた。



「どうしたの？」

レミリアは椅子に座って背中を流してもらっている。

「いや、今何か聞こえた気が……。気のせいかな？」

霊夢に視線を戻し、お湯で泡を流した。

「ありがとね。」

霊夢とソラは一緒に湯船につかった。

「はああああー」

同時に脱力の声をあげた。

「……………つて、馴染んでどうするっつうっ！……！」

ソラは大声をあげた。

幻想郷の端。決壊が張られているこの場の空気が一変した。

次の瞬間、結界にひびが入った。決壊はどんどん崩れ去り、最後には破片となって辺りに飛び散った。

すると結界の奥から何かが入り込んできた。

『美しい……。このような場所が存在するとは……。』

怪しい笑い声をあげたその大きな影は後ろにいた者達に声を張り上げた。

『諸君、今から命令をする。』

この村の住人を片っ端から捕らえるのだ。そして捕らえた人々を人質にするのだ。わかったか！』

その声とともに、周りにいた者達が罵声をあげた。

「!?!?」

藍は今まで感じたことのないさつきを感じ、決壊が張り巡らされている方向を見た。

「な、なんだ・・・、今の殺気は・・・？」

藍はすぐ立ち上がり、橙にいった。

「橙！今から結界を見てくる！私が出て行ったら戸締りをして、私が帰ってくるまで誰も中に入れるな！」

橙は首をかしげた。

「？・・・はい、わかりました。」

藍は家を飛び出た。橙は紫のすぐ傍について遊び始めた。

「一体どうしたんだろう？藍しゃま。」

少し寂しそうに声をあげた橙はすぐに戸締りをした。

全ての戸締りを確認し、安堵の息を吐いた橙は奥を見つめた。

「・・・紫様のスキマ、まだ出てる。」

スキマはうねうねとくねり、気味悪く蠢いている。

「・・・。」

橙は部屋の奥にひっこんだ。そして紫のすぐ傍に座り、自分を安心させた。

「・・・一人は寂しいなあ。」

と呟いて、近くにあった小さなボールを投げたりして遊び始めた。

「このボールも藍しゃまと一緒に遊ぼうと思ったのに。」

少しだけボールを強く投げてしまい、壁と天井で跳ね返り、ちょうど紫の顔面にぶつかってしまった。

「ふにゃ!?」

紫は少しだけ苦痛の顔を浮かべた。

「ん・・・。」

その時だった。スキマが少しだけうねりが激しくなった。うねりが激しくなり、どんどん肥大化して言った。

うねりが最高潮に達し、そしてうねりが止まった。

すると、スキマの中から青い色をした巨大な手によきつとのおびてきた。

「紫さま、大丈夫かなあ？」

橙が心配していると、突然奥から足音が響いた。

「？」

気になって見に行ってみた。

「なんだろ、今の音。」

あたりをキョロキョロ見回した。電気は消して、戸締りもしてしまつたので真つ暗だ。

でも、何故だろう。橙はどんどん怖くなつてきた。

「・・・？」

何故だか分からない。誰もいないみたいなのに、何故こんなに恐怖を感じるのかが分からなかつた。

「っ・・・！」

心臓がバクバクなつて、息も荒くなつてきた。

そしてとうとう恐怖に耐え切れなくなつたのか、橙はすぐさま紫のいる部屋の電気を消して、紫の寝ている布団の中に入り込んだ。

（やだ、怖い・・・。怖いよ。藍しゃま、早く・・・早く帰つてきて！）

そう心の中で念じた。

すると何かがバキバキと折れる音が響いた。

「！？」

吃驚して頭を抱えてしまつた。しかし数秒後には音も聞こえなくなつた。

「・・・？」

怖かったが、藍もおらず、紫も気絶している今、確かめるのは自分しかない。意を決した橙は布団をどかして目の前を見た。

驚く事となった。目の前の襖が、派手に蹴破られていた。

「……。」  
眼を凝らした。すると奥に不気味に蠢くものが見えた。

「……？」  
そしてそのうごめくものは、ぬるりところらを向いた。

「っ……!？」  
その蠢くものから2つの眼光が見えた。

「あ、ああああ!!!!!!!!!」  
橙は恐怖のあまり、叫び声をあげてしまった。

「ちょっとレミィ。いくらなんでもあれはひどいわ。フランはずっと地下牢獄にこもっていたのよ？アレくらい許してあげても……。」

「レミアはまだ怒っていた。」

「でも、こんな夜遅くまで遊ばれたら怒らずにいられる？あの子も少しは学習しなくちゃいけないの！」

「そういつレミアは自分の部屋に入ってしまった。」  
「もう……。」

パチュリーはほとほと困ってしまった。これ以上言っても仕方ないと思ったパチュリーは図書室に戻ろうとした。

「まあ、心配もするわね……。お姉様だもの。」  
パチュリーはそう呟いて図書室の前にたどり着いた。

「そういえば、咲夜が教えてくれた願いの叶えてくれる本。案外こ

の図書室にあつたりするんじゃない……。まさかね。」  
ドアノブをひねった。

突然中からガラスが割れる音が響いた。

「!?!」

何者かが侵入したのか? そう思ったパチュリーは焦ってドアを開け、中を見た。

「誰!!!!!!」

声を張り上げた。すると窓のところに誰かがいた。

「!。。。ちよつと待ちなさい!」

その一つの影は何かを持っていた。しかし立ち止まることなく、俊足にその場から出て行った。

「早い。。。!」

パチュリーは窓の下まで来た。派手にガラスが散っている。

「一体、どうやってこの図書館に侵入を。。。?」

パチュリーはあたりを見回した。

「。。。なによ、これ。」

信じられない光景を眼にしたパチュリーはその場で膝を着いた。

ブワル魔法図書館の本棚の中の本が、全てばら撒かれていた。

「うーん。」

霊夢は外を眺めた。

「どうかした?」

ソラは布団の上で霊夢に話しかけた。

「わからない。何か聞こえたような気が……。」

「霊夢もか。」

「虫の知らせかしらねエ。」

「まあいいや。ていうか、なんで霊夢と一緒にの部屋でねなきゃあかんの？」

「いいじゃない。女の子ってのは時々誰かと寝たくなるものよ。」

「それ言つと全世界の東方厨に襲われるぞ？」

「はい？」

「ま、いいや。寝るかー。」

霊夢は電気を消してソラの隣に敷いてある布団に入った。

「ソラは明日はどうするの？」

そんなことを言われたソラは考えた。

「うーん。まあ明日もあたりを回ってみるよ。いってないところもあるしね。」

「へえ……。何処いきたいの？」

ソラは怪しい笑顔を浮かべて答えた。

「……ゆうかりんランド。」

「あなた、命知らずね。」

と、他愛のない会話をし、その日は眠りについた。

だが、刻一刻と何かは近づいていた。

## 2日目の朝

霊夢が眼を覚ました。なにやら表が騒がしい。

「んん．．．、ソラ？」

ソラを起こそうとした。

「．．．？」

しかしソラは隣にはいない。

「何処いったのかしら．．．？」

霊夢は体を起こした。

「ちよつと頭痛いわねエ．．．。飲みすぎたわ．．．。」  
頭を押さえて表に出た。

すると境内には妖精達がいた。中でも一番騒いでいたのは橙だった。

「ほんとだよ！昨日物凄く怖いお化けみたんだってエ！」

「お化けって言われてもさあ．．．。」

リグルは困った顔をしている。

「幻想郷にはお化けみたいな人はいっぱいいるし、そんなに怖いかな？」

大妖精がそういうと、

「だ、だって．．．、物凄く大きかったんだよ！？それに、目つきが物凄く怖かったの！幻想郷にはあんな怖い人いないよ！！！」

皆は返答に困った。

「ちよつとあなた達、こんな朝早くになにもめてんの？」

霊夢は声をあげた。

「あ、霊夢！」

チルノがかけてきた。

「なんかねー、橙が物凄く怖いお化けみたんだって！」

「ふーん。」

興味なさげに霊夢は頭をかいた。

「寝ぼけてたんじゃないの？大体、怖かったのなら藍や紫と一緒にいればよかつたじゃない。」

それを言うと、橙は寂しそうな顔をした。

「だって・・・、藍しゃまは昨日の夜出かけたつきり帰ってこないし、紫様は気絶して寝込んでるし・・・。」

霊夢は驚きの声をあげた。

「紫が気絶!？」

意外なことがあったものだ、と霊夢は驚いた。

「そんなに重症なわけ？」

「うん・・・。昨日の昼からおきてない。」

「そう・・・。」

橙が心配してる気持ちも少しは分かる気がしてきた。

「はいはい、そういう悲しい気持ちも、朝飯で吹っ飛ばせ。」

奥からフライパンを持ったソラが出てきた。

「あ、ソラ。」

「そのお化けの話はあとで聞くよ。ほら、飯だ飯!お前らも食べに来い!」

ソラが広間に行こうとしたら服を引っ張られた。

「ん？」

ソラは後ろを向いた。

服を引っ張っていたのはルーミアだった。

「・・・お兄ちゃんは食べれる人間か？」

その眼は輝いている。しばし無表情だったソラは突然笑顔になり、ルーミアの頭をなでた。

「そうだな。俺はな、寝ている間に物凄く美味しくなるんだぞ?」

そういうとルーミアはさらに眼を輝かせた。

「そ、そーなのか!？」

「ああ、そーなのだ。」

「じゃ、じゃあ寝てる時に食べてもイイのか?!」

「もちろんだ。」

そういうとルーミアは嬉しそうに飛び跳ねた。

「ちよつとちよつと、ルーミアにあんなこといったら洒落にならな  
いわよ？」

霊夢は焦ってソラに耳打ちをした。

「大丈夫だつて。第一こつこつ子にはこつこつっておいたほづが育ち  
がいいんだ。」

「とはいつてもねえ……。」

「さー、皆。なに食べたい？」

妖精達は次々とメニューを挙げた。

「うどん！」

「カキ氷！」

「幽香さん！」

「人間！」

「藍しゃまの尻尾！」

「うどん以外もつと思いつくことねえの？」  
すると霊夢が、

「ステーキ。」

「お願い。心の底から望んでいるのをいうのはやめて。悲しくなっ  
てくる……。しかも俺焼けないし……。」  
そしてソラはまとめた。

「よし。普通に味噌汁とご飯と海苔だ！」

「普通！」

そういつてソラはフライパンを振り回した。

朝食が食べ終わった。妖精達は遊びにいき、その場に残ったのは  
霊夢とソラだけだった。

「さて、俺はそろそろ行くわ。」

「ああ、そういえば出かけるとかいつてたわね。」

「ああ、幻想郷を回ってみたいし。色々ありがとな、霊夢。」

「こちらこそ。」

霊夢とソラは握手を交わした。

「最初は何処に行くつもりなの？」

「決まってるじゃない。」

ソラは怪しい笑顔を浮かべた。

「ゆうかりんランド。」

「死なないでよね……。」

霊夢はまたソラの恐ろしさを感じた。

「もしかしたら他のやつところに泊まってくかもしれないけど。」

「わかったわ。」

ソラは帽子をかぶり、ペンと鉛筆と消しゴムと紙を持ち、靴を履いた。

「さて、行くか。幻想郷！」

そういつてソラは神社内から飛び出し、

そして派手に転んだ。

「へぶあつ!？」

「総領娘様、今日もどこかに出掛けるんですか？」

衣玖が平坦に問いかけた。

天子は身支度を整え、うきうきしながら外にでた。

「う、うん。とはいっても、出かけるだけよ？そう、出かけるだけ  
!」

出かけるだけ、どいつているが明らかにおかしい。そわそわしながら自分の格好を気にしまくっている。普段こんな事をしない総領娘様が、まるで……。

まるで、好きな人に会いに行くかのように……。

「……誰に会いに行くんですか？」

「えー!? べ、べべべべ別にソラにあいに行くわけじゃ……!!」

「なるほど。そのソラさんとかいう人に会いに行くんですか。」

「!?？」

天子は顔を真っ赤にした。

「して、そのソラさんとかいう人はどんな人ですか? 総領娘様の性格上、そんなにうきうきするのは自分が楽しい時か、それか……」

衣玖が少しだけ眼を細くした。

「ソラ、と言う人がよほど貴女に見合った人か……。」

すると天子は衣玖に向かって要石を投げつけた。衣玖は見事に要石の下敷きになった。

「な、ななななな何いってんの衣玖はあ……!!!! わ、私がそんなことするわけじゃない!!! ただ暇だから遊びに行くだけよ!!!」

「か、顔が笑ってますよ……。」

「と、とにかく私は遊びに行くからね!!!」

天子は飛んで行ってしまった。衣玖は困ったような、しかし少し嬉しそうな顔をしている。

「全く、総領娘様ももう女の子らしい女の子になったんですねえ……。つれてきてくれるかしら?」

そういつて衣玖は奥に引っ込んだ。

「さて、ゆうかりんランドに行きがてらついでにどこか行くとしよう。」

ソラは遠めに妖怪の山を見た。

「・・・そういや、神奈子とも約束してたっけな。」  
ついでに行くとするか。そう思ってたソラは歩き出した。

やはり、幻想郷と言う世界はすごい。空気も澄んで、環境もいい。これほどまで幸せな気分になれるというのも驚きだ。そして何より、  
「・・・東方キャラ全員にあえるぜ。」

ソラは笑顔になった。

しかしなぜだろう。リアルに幻想郷の住人に会つと、不思議と如何わしい気持ちは生まれぬ。むしろ、のどかに過ごしたいという気持ちのほうが勝る。画面越しに自家発電したり、息を荒げたりしている光景はニコニコ静画のコメントから見受けられるが、その人たちもここに来ればこんな気分になるんだろうか。

「という思いが生まれたんだが、どう思う？」  
と、魔理沙に打ち明けてみた。

「いや、知らないよ・・・。」  
当然の反応をした魔理沙であった。

魔法の森にたどり着いたソラは一番に発見した魔理沙に話しかけていた。

「でも、確かに幻想郷はいいところだぜ。酒も美味しい、なにより楽しい仲間がいるしな。」

「うむ、それは確かにね。」

なんて他愛のない話をした。

「そういえば、尋ねたいことがあったんだ。」  
「なんだ？」

「幽香さんのところにはどうやっていくんだ？」

「幽香のところ？なにしに？」

ソラは笑顔になった。

「勝負しに」

「お前怖いもの知らずだろ？」

ソラは高笑いした。

「んー、まあその前に何か面白いところない？」

「面白いところ？」

唐突にそんなことを言われた魔理沙はいい場所がないか考えた。

「・・・あ、あそこがいいかもしれないな。」

「・・・で、」

アリスは苦笑いした。

「なんで私の所に。」

魔理沙は愛想笑いを浮かべた、

「ほかにいいところなかったもんで！」

「誰よこの人！」

アリスはソラを指差した。

「どうも、ソラです。」

「魔理沙、この人とはどういう関係?!」

魔理沙はふざけて、

「えつとな、こいつとは只ならぬ関係だぜ。」

次の瞬間、ソラの周りに人形たちが包丁を持って迫ってきた。

「じゃあ、この男殺しちゃって良いわね。」

「魔理沙あああああ!! お前なにいつてんだあああああ!!」  
「!!」

「アリス! 冗談だ冗談!!」

「よくも魔理沙をおおおおお!!!!!!」

「ああああああああああああああああああ!!!!」

「ごめんなさい。我を忘れてたわ・・・。」

ソラは頬にかすり傷をおった程度で済んだ。

「いや、アリスは悪くないとは思うから……。」  
ソラは苦笑いを浮かべた。

「しつつかし、本当に人形の使い方が慣れてるなあ。」

「まあね。コレくらいしかできないけど。」

「いいなあ。こんな技術ほしいわー。」

などと会話した。

「よかつたじゃないか、魔理沙。」

「へ？」

魔理沙はソラがなにを言っているのかがわからなかった。ソラは気にしないでやらせながら笑っている。

「そいじゃあアリスや魔理沙とも会話できたし、そろそろほかの所にいこうかな。」

そういつてソラが立ち上がった。

「じゃあな。もし怪しい人形があってもつれこむなよー。」

ソラはアリスの家を出ようとしたが、あることを思い出して足を止めた。

「……そうだ。紅魔館にはどうやっていくんだ？」

美鈴は門の横にずっと立っていた。あの夜からずっとフランを待っているのだが、フランがいつまでたっても帰ってこない。心配で心配で夜も眠れなかったのだ。

「……妹様。」

しかし、昨日の夜はなんだかおかしかった。妙に所々からざわめきを感じた。風のせいだろうか。

「大丈夫かなあ、妹様。」

「フランがどうかしたのか？」

ソラは美鈴に問いかけた。

「実はですね、昨日の夜妹様がお嬢様と喧嘩をしまして……。」

そりやお嬢様が心配するのも分かりますが、妹様はずっと地下牢にこもっていて、それで暇だといって外に出て行っただんです。妹様の気持ちも少しは分かってあげてもいいかなー……って、うわー！

美鈴はソラの存在に気付いてほんの少し退いた。

「び、吃驚したあ。誰ですかあなた？」

「アア、悪い悪い。ちよつと紅魔館に用があつて。」

美鈴は少しだけ警戒した。

「紅魔館にですか？」

「うん。会いたい人がいるんだ。」

「……その人は？」

「パチュリー・ノーレッジ。」

「パチュリー様に？ていうか、貴方は誰ですか？」

「ああ、知らないんだ。昨日の爆発音あつたでしょ？その原因俺。

紫のスキマでこっちにきちやった人間だよ。名前はソラ。」

「あ、思い出した。昨日寝たときに吃驚したんだ。」

「堂々と職務放棄宣言しちゃったよこの人。」

「職務放棄じゃありません！眼を瞑って仕事をしてただけです！」

「サボリじゃないか！」

「ちーがーいーまー」

突然美鈴の頭にナイフが刺さった。

「すぐ！？」

そして美鈴の後ろから咲夜が出てきた。

「その人のいうとおりよ、このサボリ魔。」

「さ、咲夜さあーん……。」

嘆いている美鈴を無視した咲夜はソラに近づいた。

「あなたが、昨日スキマから入ってきたと噂の人ですね？」

「？……ええ、まあ。」

「お嬢様が会って話したいとのことなので。もしよろしければついてきてくれませんか？」

「丁度いい。だったら俺も会いたい人がいるので。」

「パチユリー様ですね。立ち話は聞きました。」

「じゃあ、伺います。」

ソラは咲夜に付いていった。

「うっ、なんでこんな目に……。」

「お嬢様。つれてまいりました。」

ノックをして咲夜がそういうと、

『入りなさい。』

と言う声が響いた。

「失礼します。」

咲夜は中にはいった。つられてソラも入る。

「すまないわね。こんなところにまで足を運ばせちゃって。」

レミリアは豪華絢爛な椅子に座っている。

「いやいや。とはいっても、霊夢のことでつきりうらまれていると思っただのに。」

ソラがレミリアにそういうとレミリアは笑顔を作った。

「ええ、そりゃもう」

「はっはっは。」

ソラは一言余計にレミリアに言った。

「昨日霊夢と一緒に風呂にはいたり一緒に寝たりしましたが、案外可愛いところもありましたw」

「な、なんですって!?!」

レミリアは慌てて立ち上がった。

「つまりこうですよ。レミリアも1万円以上霊夢に払えばあんなことやこんなことやそんなことが!」

「咲夜!近々霊夢の所に5万円を払いに行くわよ!」

「ええ!?!」

咲夜は驚いた。

「お、お嬢様！今の問題はそこじゃありません！この人にいうことがあったのでしょう？」

咲夜にそういわれたレミリアは我を取り戻した。

「そ、そうね。実はフランの事で貴方に聞きたいことがあるの。」

「フランの事？」

レミリアはほんの少し落ち込んだような素振りを見せた。

「昨日の夜、ちょっと口論をね。それであの子出て行ってしまったの。後で美鈴に聞いた話だと、貴方フランと遊んでくれたみたいじゃない。」

「ああ、確かに。」

するとレミリアは平坦とソラに言った。

「こんな事をお願いするのはなんなんだけど、もしフランを見つけたらつれてきてくれない？報酬は出すから。」

ソラは口に手を当てた。

「・・・別にいいけど。」

「そう。ありがとう。パチュリーは図書館にいるわ。」

レミリアは立ち上がってその場を後にした。

「・・・。」

ソラはただただレミリアを見つめるだけであった。

「はぁ・・・。」

パチュリーは割れた窓ガラスと本棚を交互に見つめた。

「窓ガラスも割れて、本も散らばったまま。一体なんだっていうのよ。」

小悪魔は焦って窓ガラスの破片の処理や本の片付けにあちらこちら走り回っている。

「小悪魔、焦って窓ガラスの破片踏んだり本ぶちまけたりしないでよ？」

「わ、わかってます！今すぐお片付けしますから・・・って、あれ

？足から血い出てるうっう！！！！ひゃうああああああああ  
ああ！！！！！！」

叫び声と同時に本が落ちる音が聞こえた。

「・・・はあ。」

パチュリーはさつきより大きなため息を吐いた。

「・・・にしても、」

パチュリーは昨日窓のところにいる人物の姿を思い浮かべた。

「あの人は一体誰だったのかしら。」

「あんな高いところにいたってことは、普通の人ではない。かといって妖精や妖怪みたいに妖力も全く感じられなかった。」

「一体・・・。」

するとまた奥から声が聞こえた。

「あ、す・・・すいません。」

小悪魔の声だ。吃驚するように誰かに謝っている。

「え、パチュリー様ですか？あちらにいらっしやいますよ。」

すると小悪魔が本棚の脇から出てきた。

「パチュリー様。ご面会です。」

「一体誰？」

「昨日、妹様と一緒に遊んでくれた人みたいですよ。」

すると遅れてソラが出てきた。

「どうも。」

ソラをみたパチュリーは眼を見開いた。

「・・・猫耳？」

真っ先に気になったところを口に出してしまった。

パチュリーとソラは大量の本が積み重なったテーブルの上でお茶を飲んでいた。

「なるほど。それで幻想郷に。」

「うん。」

パチュリーはソラにたずねてみた。

「でもわからないわ。なんでわざわざ私に会いに来たの？」

ソラは笑顔になり、  
「本のことについてよく知っていきそうだったから。」  
するとソラは鞆からクリアケースを取り出した。  
「コレ、俺のかいた小説なんだけど、興味ある？」  
パチュリーは紅茶の入ったカップを置いた。  
「小説を書いているのね。まあ、暇だから見てあげるわ。」  
パチュリーはソラから小説を受け取って黙々と小説を読み始めた。  
(ま、暇つぶしにはなるでしょ。。。)  
そう思つて、一ページ小説を捲った。

「どうだった？」  
「。。。ねえ、あなた。」  
「ん？」  
「この続きはどい？」  
「。。。ああ、その続きまだ書いていないんだ。」  
パチュリーは愕然とした。  
「そ、そんな。。。！こ、この凄い能力を持った青年はどうなるの  
！？」  
「すつげえ強くなる。」  
「つ、続きが気になるわ。。。。」  
パチュリーは頭を抱えた。  
「暇を潰すつもりが、楽しみが増えてしまった。。。。」  
「まあまあ、今度作ってくるから。」  
「ほんとね？約束する？」  
「うむ。」  
そついうとパチュリーは満足したように笑顔になった。  
「ああもつかわいひなくそ。」  
ソラは早口で言った。  
「なにかいった？」

「いんや。」

同時刻、紅魔館の前を天子が歩いていった。

「ソラ、何処にいるのかしら？あの夜から行方がつかめないわ……。目撃証言もないし……。」

すると天子は地面にぶっ倒れている美鈴と出くわした。

「……。？」

美鈴は頭にナイフが刺さったまま泣いている。

「うう。咲夜さん、いつにもまして冷たい……。お嬢様が不機嫌なのがそんなにいやなんですか？やつあたりですか……。」  
天子は少しだけ羨ましそうに見ている。

「いいなー。」

しかしソラとは関係がなさそう、と思った天子はソラを探してまたさ迷い始めた。

「……。あら？」

パチュリーは何かを思い出した。

「ん、何？」

「……。ねえ、私と貴方って前にどこかであった？」

ソラは眼をぱちくりさせた。

「……。いや？実際に会ったのはこれが初めてな気がするんだけど。」

「そう……。」

パチュリーは眉をひそめた。

「デジャヴかしら……。？でもどこかで……。」

ソラは人差し指を突き上げた。

「ま、まあ俺みたいなの顔つきの奴っていっぱいいるし、何か本に出

てきた登場人物と似てたんだろ。」

本、と言う単語で何かを思い出したソラは周りを見回した。

「本、といえば……、この惨劇は一体なんなんだ？」

パチュリーも釣られてあたりも見回す。

「実は昨日の夜、誰かがこの図書館に侵入してきたのよ。盗まれたものはないと思うけど、それでも何か胸騒ぎみたいなものがあって、それで今迅速に片付けをしているのよ。」

「どつりで小悪魔が頑張ってるわけか。俺も手伝おうか？」

パチュリーは首を振った。

「いえ、大丈夫よ。客人に手伝わせるほど私たちの屋敷は失礼ではないわ。」

「そうか。」

ソラは改めて周りの凄さに驚いた。

「しかし、コレだけ本があると一冊くらい取られてもわからないだろうなあ。」

「分かってしまうから魔理沙みたいなやつを退治してるんじゃない。」

「

「あいつの場合は大量に持ってくからじゃね？」

「それもあるわね。」

2人はただ呆然と図書館内を見つめていた。

数分たち、ソラは息を吐いた。

「よしっ！俺そろそろ別の所に行くよ。」

「あら、もう？」

「うん。色々行きたいところもあるし。」

「そう。」

「じゃあ、また会えたら話そうな。」

「ええ。」

そういつてソラは歩いて図書館を出て行った。その様子をパチュリーは不思議そうに見ていた。

「……あの人、何処となく不思議ねえ。」

そういつてパチュリーはテーブルに積み重ねてあった本を一冊手に取り、黙々と読み始めた。

ソラは紅魔館の外にでて背伸びをした。

「んーっ……！よーっし、次は妖怪の山あたりかな？」

妖怪の山を眺め、頬のかすり傷をなでた。

「うーん、なにもしなけりや大丈夫だけど、大きな衝撃には耐えられないな。」

ぶつぶつといいながら歩き出した。

「そういえば、てゐがああ薬ぶちまけてからこっちに来なくなったな。ひよっとして永琳にお仕置きされているのか？」

ぜひともそのお仕置きに加わりたいものだと思ってしまった。

「いいなあ、いつつも悪戯ばかり仕掛けてる奴に精神的肉体的にお仕置きして心をぶち壊して全てを我が物にしたとき、もう相手は玩具になる。その時の快感ときたら……ふふふ。」

ソラは放送ギリギリの顔をした。

するとソラは誰かにぶつかってしまった。

「わぶっ！」

「ん？」

ぶつかった相手はその場に蹲った。

「い、いだあ……。」

「お姉ちゃん、大丈夫？」

ソラは真下を見た。

「……秋姉妹だ。」

目の前にいたのは秋 静葉と穰子だった。

ぶつかった静葉はキッとソラを睨んだ。

「ちよつとー！ちゃんと前見てよオ。」

「ごめんごめん。」

静葉は頭を押さえた。



ので、代わりとってはなんです、これをどうぞ。」

「お、きゅうりじゃん。」

「はい。大量に育ったので。」

「ありがとな。」

きゅうりを鞆に入れた。

「ほら、お姉ちゃん。行くよ。」

「お兄さんを殺しちゃったあ……！」

「とつとと気付いてくれよ……。」

ソラは心配そうな顔をした。静葉と穰子はとぼとぼ歩いていくので、まだソラは心配そうに見ていた。

「大丈夫か？」

ソラは向き直り、また前に歩き出そうと一歩前に進んだ。

ザクッ！

目の前に大きな鎌が突き刺さった。その鎌はソラの髪の毛の先を掠り、地面に刺さっている。

「……………」

ソラは無表情に鎌が落ちてきた上空を見上げた。

上には木があつた。しかし問題はそこではない。大きな木の枝の上に紅い髪がゆれているのが見える。それに加えて鼻提灯。

「なるほど。」

それだけで理解できた。こいつは多分、小野塚 小町だ。

すると上から声が聞こえてきた。

「えへへ……、四季様あ……。それ、私の胸です。おやつのだかプリンじゃないですよ……。」

咲夜や天子が聞いたらブチ切れそうな台詞だな。とはいえ、俺の命

を危険にさらした死神だ。こいつは仕返ししないとな。

そう心で決心したソラは足をあげて木に強力なキックをぶちかました。

木は激しく横に揺れ、そして小町が落ちてきた。

「ふああああへぶらいつ!?!?」

寝ながら落ちてきたんだ。衝撃度はすさまじいだろう。

「あいつたたたあ・・・!なんだよ、寝てるときは落ちたことないのになあ・・・」

すると小町は頭を鷲掴みにされた。

「おい、サボリ魔死神。」

「いだつ!だ、誰!?!」

小町は後ろを向いた。

「ん・・・?本当に誰?」

「ソラだ。ていうかそれ以前に、それ。」

ソラは鎌を指差した。

「落とすなよな。俺殺されるところだったぞ、死神に。」

「ああ、鎌を落とすしまったのか。悪い悪い」

小町はへらへら笑っている。

「このやるー。」

小町がソラの腹部を見た。

「・・・って、凄い怪我してるじゃないか!今すぐ三途の川に!」

「まだ死んでねえよ!あ、いや・・・。厳密に言えば死んでるのか生きてるのかわからんが・・・。これはトマト。血じゃねえ。」

「なんだよー。せつかくいい仕事が出来ると思ったのに。」

「勝手に殺すな。」

「ははは、悪い悪い。よしと・・・。」

小町は立ち上がるうとしたがなぜか力が入らなかった。

「いった・・・!あ、あれ・・・?」

小町は背中を擦った。

「いちち……。背中でも打っちゃったかな……。？」

「……。痛いのか？」

ソラは小町を見つめた。

「ん、ああ。」

するとソラは怪しい笑顔を浮かべた。

「……。だったら、その痛みなおしてやるうか？」

「お、直してくれるのか？」

「ああ、しかもとても気持ちのいい方法でな。」

「おおー。いいじゃんいいじゃん！それやって！」

するとソラは指をこきつと鳴らした。

「じゃあ、まずそこにつつぶせになって。」

小町ははりきった。

「おーし、あたしはどんなものでもすぐきもちいーなんていわない

ぞー！我慢強いからな！」

小町のその言葉を聞いたソラはさらに怪しい笑顔を浮かべた。

## 2日目の昼（前編）

天子は茂みの中を歩いていた。

「うーん、道と言う道にいなかったから裏をかいて茂みを探して歩いてみたけど、いないわねえ……。」

さつきからずつと茂みを探しているが、ソラはおるか人っ子一人見つからない。

「むー……。」

幻想郷の広さが尋常じゃない事を改めて知った。

「……仕方ない。一旦戻ってまた体制をととのえ」

『だ、駄目……、ソラの旦那……！そこは……んん……っ』

天子はぴくりと反応した。

（ソラの、旦那……？）

天子は声のする方向に走り出した。しかも無表情で。

「っ……っ！」

声が大きくなってきた。そしてやっとかすかに姿が見えた。

「あれは……。」

天子は咄嗟に茂みに隠れた。

『どうだ？めっちゃくちゃ気持ちいいだろ？』

ソラは誰かに向かって声をあげている。

『き、きもちよきは……んん……っ！』

誰かの甘美な声が聞こえてくる。

（誰？一体誰がソラに遊ばれてるの……！？）

天子はあまりの興奮状態に息を荒げている。

気になりすぎて、とうとう頭をあげて相手にされている相手の顔を見た。

「?!」

相手は死神の小町だった。

(な、何故・・・！？)

小町はまるで今までにない快感に溺れているかのようなとろんとした顔をしている。

「だ、旦那ぁ・・・。ん・・・、ら、らめ・・・、そこは・・・。」

「なんだよ、あんなに我慢強いっていつておきながら・・・！」

「ふあつ・・・！！！」

ソラが力を入れると小町は小さい叫び声をあげた。

「ほら、そんなに女の子みたいなお声あげちゃってさぁ・・・。」

ソラはまるでからかうように笑っている。

その光景を天子はすでに全身を震わせながら黙視していた。

(ソラが、別の人、っていうか死神と・・・。なんか・・・なんかしちゃってるノノノ)

ソラの姿は見えない。これ以上身を乗り出すと自分の姿が見えてしまふ。

(なんで、あんなに笑顔を向けてくれたソラが、私を差し置いて・・・死神と・・・。)

なんだか絶望に近い思いを感じていた。そんな思いを感じているのに、何故・・・。

何故、こんなにも興奮してしまうのか。

(・・・ひよつとして、コレ、寝取られフェチっていうの?!)

新たな快感に気づいてしまった天子はさらにその場に蹲った。

「ほら、もう言っちゃえよ。」

「や、やだ・・・！いつたら・・・、それこそ・・・！」

「・・・仕方ない。」

ソラは全身の力を小町に入れるように腕を押しした。

「ああつ・・・！だ、駄目、そこ・・・そこ・・・気持ちいい！」

小町は全ての快感を出し切るかのように本音を言ってしまった。

(なに、この心をえぐられるような感覚・・・。凄くいやなのに、苦しいのに、気持ちよさを、感じちゃう・・・！)

なんてもう危ない発言を考えてしまい、そして最後には、

ばったり気絶してしまった。

「ふうー。」

ソラは疲れたかのように息を吐いた。

「どうだった小町。気持ちよかったろ？」

小町もさつきとは打って変わって元気になっている。

「ああ。これは気持ち良いっていうしかないなあ。しっかりと旦那、」

小町は驚いたかのようにソラを見つめた。

「指圧上手いなあ。ありや職人並じゃないか？」

「ああ、親に頼まれてよくやらされてたからさ。ツボ押し。」

さつきまでソラと小町が繰り返していたのはツボ押しだった。

「いやー、背中痛いのはこのところ毎日だったんだけど、まさか

ツボ押しが効くとは・・・。あはは」

「ああ、俺もまさかなーとは思ったけど。さて・・・。」

ソラは鞆を持ち上げた。

「俺はそろそろ先に進むわ。この先は確か迷いの竹林と永遠亭、そ

して妖怪の山の先は幽香さんの花畑か。」

「お、旅かい？」

「ま、そんなところだ。それじゃあ仕事しろよ。」

ソラは手を振って先に進んだ。

「いやー、中々面白い旦那だなー。」

小町がへらへら笑っていると、突然茂みが揺れた。

「私だってソラにもてあそばされたいわよおおおおおおお！！

！！

と、天子が興奮状態で茂みから出てきた。

「ぬおわあっ?!」

小町は吃驚して退いた。

「な、なんだお前!？」

「あ、あなたあ……、何ソラと危ない行為してんのよ……!」  
「はあ？」

「ソ、ソラと……セ……セ……セ……!!!!」  
「ソラ? ああ、さっきの旦那か。確かにさっき旦那にツボ押しして  
もらったけど。」

「ほら、やつぱりされてたじゃない! ソラにツボ押し……って、  
え? ツ、ツボ押し?」

「ああ。ツボ押し。」

今までの台詞を思い返し、そしてやっと理解した天子はあまりの恥  
ずかしさに顔を真っ赤にさせた。

「あ、あああ……。アアアばばばばばばばばばば!!!!!!  
!!!!!!!!!!」

天子はそのまんま飛び去ってしまった。

「ひいやああああああああああああああああああああああ  
ああああ!!!!!!!!」

小町はただばかんと天子を見つめていた。

「一体なんなんだ、あいつ……。」

「うーん、昨日迷いの竹林から出れたのは妹紅のおかげだからよか  
つたんだが、」

ソラはとことん困り果てた。

「やつぱり迷っちゃった。」

その場で立ち止まり、上空を見上げた。

「どうにかなると思った俺が馬鹿だったなー。」

立ち止まっても状況は変わらないと思ったソラは歩き出した。

「てつきり妹紅と会えると思ったんだが、早々上手くいかないなあ。

上さんみたいにそういうフラグはそうそう立たんか。」

ソラは竹林の角を曲がった。



「いや、それは絵面的にやばいんじゃないか……。」

「もう霊夢のところで経験積みだから慣れたよ……。」

「え、いや……その、心の準備というものが……。」

ソラは構わずしゃべりだした。

「いやー、霊夢のところにお世話になりっぱなしってのは悪いし、それに妹紅は一番最初に会った人だからさあ。なんかしゃべりやすいというかね。」

「な、なるほど。」

すると妹紅は何かを思い出した。

「そういえばソラって、外の世界からきたんだよね？」

「ん、ああ。」

「じゃあさ、色々と教えてくれないか？私、そういうの少し興味あるし。」

「ああ、いいぞ。」

少しだけお互いの距離が縮まった気がした。これで安心して話し合いが出来る。

……アアアアアアアアアアアアアアアア……

「!？」

竹林の奥から奇奇怪怪な叫び声が聞こえてくる。

「な、なんだ……今の変な叫び声。」

「永遠亭のほうからだぞ？」

ソラと妹紅は走り出した。

「そういえば、橙が昨日の夜、めっちゃくちゃ大きい変な化物見たって……。」

「それ、本当か？」





ソラはてゐに近づいた。

「こっちくんな変態！あたしに触ったらどうなるか・・・！」  
ソラはロープを解いた。

「！」

ソラの意外な行動にてゐは驚きを隠せなかった。

「はいはい、どうなる前に俺は逃げるから。とりあえず降りろ。」

ソラはてゐを抱えて、そのまま地面に下ろした。

「・・・。」

てゐはソラのなすがままにおろされた。

「全く。」

てゐはなんだかソラをみるのが恥ずかしくなつてきて顔をそらした。

「あ、ありがと・・・。」

「お前が有難うとかいうのは変だな。まあいい。目覚めたときは俺に言えよ。」

そういつてソラは竹林の隙間から見える妖怪の山を見た。

「うーむ、永遠亭に寄ったらいくか。」

「永遠亭に入るのか？」

「ああ。」

「じゃあ私は一旦戻るよ。輝夜にはなるべく会いたくない・・・。」

「正直なこつて。」

ソラは玄関をあけ、庭に入った。

「ふむ、ついでにこの傷の塗り薬でももらうかな。ほら、てゐ。お前もこっちこい。」

「いや、でも抜け出したのばれたらまた怒られる気が・・・。」

「そんなときゃ助けてやるよ。」

と、ソラはてゐの頭をぼんぼん叩いた。

「むう・・・。」

「しかし広いな。」

「気をつけなよ。師匠がいつ私たちを攻撃してくるか・・・。」

「してくるって言ってもお前だけにだろ？」

「いや、怒ってたから見境がないと思う。」  
「そんなときはお前を盾にするか。」  
「あんたやっぱり最低ウサ……。」  
「ていがぼそりと呟いた。」

突如、目の前に弾幕が広がった。  
「!?!」

その弾幕は無限に広がった。しかしどこかでみた事ある。

そうだ、この弾幕は……、

天呪「アポロ13」

「や、やばい……。」「  
てゐは冷や汗を流した。

すると奥から声が聞こえた。

「てーゐ」  
この優しそうな反面、明らかに恐怖の色を感じるこの声は……。  
「し、ししし……師匠。」  
てゐが顔を青くした。

「アポロ13……。そうか、永琳か……。!」  
ソラに呼ばれた永琳は角から出てきた。

「あら、あなた幻想郷に来た人間ね。初めまして。」  
永琳は頭を下げた。

「こちらこそ、初めまして。」  
ソラもペコペコ頭を下げた。

「あんたなんでそんなに落ち着いてられんの!?!」  
てゐはあたりをキョロキョロして逃げ道はないかとてゐは模索していた。

「てるー、逃げちゃ駄目でしょー」  
「といって永林が腕を下ろした。」

途端に弾幕がソラたちに向かって襲い掛かってきた。

「ウサああああああ！！！！エンシエントデューパー！！！！」  
「てるは負けてたまるか、と死んでたまるか、の思いで弾幕を放った。  
まあ、力の差は歴然と言った所で、てるの弾幕は消され、大量の  
弾幕が目の前まで迫った。」

「も、もう駄目だ……。」  
「てるは諦めた。しかしなぜか心強い。隣には関係ないソラまでいる  
のだ。どうにかソラを盾にしよう」とソラをみた。

しかしそこにソラはいない。変わりにソラの絵が描かれた紙が置  
いてあり、

『うそウサ』

と文字まで書かれていた。

「……………」

てるは握りこぶしを作った。

「うらんでやるこんチクしょおおおおおおお！！！！！！！！！！」

ピチューン！

てるが消える瞬間をソラと永琳は嬉しそうにみていた。

「……悪戯ばかりしている奴が苦戦してるの見てるのって、最高  
ですよね」

ソラが嬉しそうに言った。

「ええ、そうね」

永琳も賛同し、両者は心の通じ合いを感じ、互いに握手をした。

「はい、傷薬よ。」

ソラは永琳から傷薬を受け取った。

「ありがとうございます。ところで永琳さん。」

「なにかしら?」

ソラは部屋の角を指差した。

「あれ、なんでこんなところにおいてあるんです?」

永琳はソラの指差した方向を見た。

そこには昨日、優曇華が持ってきたあの有名な太の塔が置いてあった。

「ああ、これね。竹林近くに落ちてたつて優曇華が持ってきたのよ。」

ソラは塔に近づいた。

「・・・これ、俺の描いたやつにそっくりだな。」

「描いたやつ?」

「ええ、俺ここに来る前にこの塔の絵を沢山かいてて。」

「・・・てことは、貴方の能力は絵を具現化させる能力?」

「ええ。」

「じゃあそれが発動したのね。どうする?回収する?私はそれはそれで気に入ってたんだけど。」

「気に入ってるならもってていいですよ。俺もこの絵いっぱい持ってますし。」

「そう、ありがとうございます。」

そういつて永琳は何かを調べ始めた。

「・・・なにしてるんです?」

「薬の調合リスト。てみが持ち去った薬にどんな効力があるのか調べてるのよ。」

「ほお。」

「大体はわかってるわ。今はこぼれてなくなっちゃったけど、もしまだここにあつて、数分かき混ぜてれば、己の力が数倍アップする効力があつたわ。」

「凄じくないですか。」

「その分精密だったけどね。他の薬がちょっと混ぜただけで他の薬に変わっちゃうから。効力は同じでも危険な薬になるわ。だからもう無理ね。逆に言えば消えてくれてよかったわ。」

永琳は眼鏡を机の上に置いた。

「だからあんなに怒ってたんですか。」

「あの子には本当に困ってるのよ。」

すると奥から声が聞こえてきた。

『えーりーん……！』

その声を聞いた永琳はまたため息を吐いた。

「……今度は別の困る根源が来たわ。」

するとドアがあいた。入ったきたのは輝夜だった。

「永琳ー。お腹すいたー。何かお菓子ちょうだ……。」

輝夜はソラをみた。ソラも輝夜を見た。

「っ……。」

ソラは眼を見開いた。

「？」

ソラがずかずかと輝夜に近づいた。

「え、誰？この人。」

するとソラは輝夜の頭をなで始めた。

「な、なにすんのよ！」

輝夜はすぐ手をはじいた。

「はっ……！す、すまん。目の前にこんなに綺麗な黒髪ロングがあつたからつい……。」

そういわれた輝夜は自分の髪の毛を見た。

「そう？あなた、中々いい眼してるじゃない。」

「黒髪ロング好きな俺にぬかりはなかった。」

すると永琳が呟いた。

「だがニートだ。」

ソラは泣き出した。

「なんでよ!!!!!!」

ソラと永琳は次の瞬間爆笑した。

輝夜はこのコンビを見てすぐ思った。この2人のコンビは、最強な感じがする、と。

「まあ、お菓子を食いたいならコレを差し上げよう。」

ソラは鞆からお菓子を取り出した。

「・・・なにこれ？」

ソラが輝夜に差し出したのは「板チョコ」だった。

「それは幸せの塊だ。」

「幸せの塊？」

「食べると幸せになれる。」

「まじで!」

輝夜はパッケージを破ってひとかけら口に放り入れた。

「むぐ・・・むぐ・・・。」

次の瞬間、輝夜は身体を震わせた。

「な、なにこれ・・・。甘い!美味しい!幸せ!!!!!!」

「ははは!。そうだろそうだろ!」

永琳も近づいてきてチョコを見た。

「なにこれ、麻薬?」

「いや・・・。麻薬じゃないけど、まあ甘党にとっては麻薬みたいなものだな。」

「ふーん。」

「いいよねえ、チョコは。幸せな気分になれるし、何もかも忘れられるし。ああ、でも一日甘いもの抜かすと俺発狂してのどかきむしつて奇声発するからなア。」

「それ本当の麻薬じゃないわよね?」

「危なくなってきたわね、この人。」

「そういえば優曇華がないじゃん。」

「ああ、優曇華ならまた買ひ物に出かけたわ。」

「人使い、てか兎使い荒いな。会えなかったのは残念だが、時間が

惜しい。そろそろ妖怪の山に行くとするか。」

ソラは帽子の位置を整え、固定した。

「じゃあ薬の件、がんばれ！」

そういつてソラは部屋を出た。

「。。。。」

永琳と輝夜は黙ってソラが出て行くのをみていた。

「。。。ねえ、永琳。あの人って変？」

「。。。変、というか、なんというか。」

ねえ。。。と二人は何かを悟った。部屋の外にいたソラは微笑を浮かべていた。

「。。。変、か。その通りだな。」

そのままとこと帰っていった。

妖怪の山についたのは数分後だった。川の音や遠くから聞こえる滝の音。まるで癒しの空間だ。しかし、川の近く。その道の隅に人影があつた。水色の服を着て、帽子をかぶった少女は、色々な発明をする河城にとり。地面にぺたんこ座って上目遣いで目の前の人物を見ている。

目の前にはソラがいた。明らか怪しい笑顔でにとりにあるモノを見せていた。

「。。。ほんとに、これ、食べていいの？」

にとりはか細い声をあげた。

「ああ、食べて良いんだぞ？」

「で、でも。。。こんなに大きくて太いの、口に入るかどうか。。。。」

「そんなときゃそんな時だ。」

にとりはその太くて大きいモノに小さい手で触れた。

「・・・じゃあ、食べるね。」

躊躇いながらも、ソラが差し出しているモノにかすかに口をつけた。

「ん・・・。」

徐々に口に入れ、そしてそのモノを、

新鮮な音とともに噛み切った。

「んんー！！！！美味いよ、このキュウリ！さすが豊穰の神がつくった野菜。」

「そうかそうか。前半の文面はさておき、美味しそうだなによりだ。」

「人間つてのは恐ろしいって聞いたけど、そうじゃない人もいるんだねえ。」

きゅつりを食べ終わったにとりは立ち上がった。

「ふう。ところで、妖怪の山に何しに来たの？」

「ああ、ちよいと烏天狗の所に行こうとおもってな。」

「ほうほう。取材でも受けに行くのかい？」

「まあ、そんなところだ。」

にとりはへらへら笑っている。

「気をつけなよー。文は見境ないし、それに自ら取材を望むものには尚更だと思うよ？」

「その通りです！！！！！」

と、上空から声が聞こえてきた。

「！」

にとりとソラは上空を見上げた。

そこには文がいた。

「また会いましたね。」

「おお、文じゃないか。」

ソラは声をあげた。

「昨日の夜以来ですね。さあ、話を聞かせてもらいましょうか。」



「・・・？」

本能って恐ろしいよね。

「さて、ソラさん。立ち話で悪いですが、色々お聞かせ下さい！外の世界ってどんな感じですか？」

「いいところも有り、悪いところもあるという感じだね。」

「ふむふむ。こちらに来て初めて思った感想は？」

「もう、ゴールしても・・・いいよね？状態でした。」

「なんだかよく分かりませんがすごさが感じてきますね！ソラさんの能力は絵を具現化させる能力だと伺っておりますが？」

「ああ。実証済みで、フランも倒したし。」

「なんと！あの吸血鬼の妹を倒すとは・・・！」

と、こんな感じで数分のインタビューが終わった。

「いやア、いいネタが出来ました。」

「お疲れー。」

「あ、コレ昨日の新聞です。御礼に差し上げます。」

ソラは文から新聞を受け取った。

「おお、さんきゅー。」

ソラは新聞に眼を通した。

「お、このスキマの記事。これが俺に関係するのか。なんか変な気持ちなア。この薬は、てめだろー？こーりんの店崩壊寸前？知らん。願いの叶う本？正直ほしい！」

と、感想を述べた。文は満足そうにしている。

「しかし、ソラさんはそんなに強かったんですか。」

「俺でも吃驚したよ。」

椀はソラの言葉に驚いているようだ。ソラは必死に首輪を掴んでいる手を抑えた。

「そういえば、早苗さん。昨日はすごかったですねー。フルーツのためにあそこまで身体を張るとは。ソラさん、妖怪の山にいるときは背中に気をつけたほうがいいですよ？」

「うん。後ろから包丁でざっくりって一番有りそうだし。」

文と椀は笑った。

「あはは。いくら早苗さんでもそれは……………」

「!?」

「??」

ソラは文と椀の顔を交互に見た。

「どうしたん？」

「背中には気をつけましょう」

背中から聞こえる可愛らしい声。そしてソラの額から流れる冷や汗。そして寒気。

「…………その声は、早苗さん？」

ソラは恐る恐る声をあげた。

「正解です」

ソラはロープにぐるぐる巻きにされ連れ去られそうになった。

「うあああああああああああああああ!!!!!!」ちよ、助けてえええええええええええええええええええ!!!!!!」

「早苗さああああああん!!!!!!駄目です!人を連れ去るのはあああ!!!!!!」

「けははははははは!!!!!!フルーツウウウウ 林檎、蜜柑、葡萄、バナナ、桃、ドラゴンフルーツ!全て私のものおおおおおお

おおおお!!!!!!」

「怖い!この奇跡の人怖いいいいいいいい!!!!!!」

ソラは泣き叫んだ。

「おお、やはりドSはうたれ弱い!」

「あの話は本当でしたか!」

「いや感心してる前に助けるよ犬と烏!!!!!!」

「ソラさん…………」

耳元でささやかれた。

「ひゃうい?!」

ソラは情けない声をあげた。

「大丈夫ですよ。怖がらないで。ただ私の前でずーっとフルーツを使ったお菓子を作ってくれば良いだけの話。霊夢さんにひとりじめはさせません。ただし、断ったら、」  
早苗はソラに包丁を突きつけた。  
「どうなるかわかりますよね？」  
ソラは涙を流した。  
(殺される！)

ゴッ……!

と、低い音が鳴り響いた途端、早苗が倒れた。

「……?」

後ろにいたのは神奈子。

「すまないね、うちの早苗がまた迷惑をかけて。」

「あ……いや……。」

神奈子はまた早苗を担いでぶつぶついいながら帰っていった。

「早苗エ……。」

3人は同時に叫んだ。

「事実、ここにいるのはもう怖いので、俺そろそろ目的地いくわ。」

「目的地? 一体何処ですか?」

ソラはにんまりした。

「ゆづかりんランド」

「ご冥福をお祈りします。」

文と椛に同時にお祈りされた。



## 2日目の昼（後編）

天子はため息を吐きながら歩いていた。

「はア……。なんかどつと疲れた……。勘違いとはいえ、かなりの恥をかいたわ。まあ、それも気持ちよかつたんだけど……。でもまだ一番の目的が達成されていない。」

ソラにまだ会っていないからだ。こればかりは満足が出来ない。

「……大規模な放置プレイって思えばあれだけど、なんだかなア……。ん？」

花畑が目に入った。相変わらず綺麗なところだ。

「幽香のところか。ま、ソラもないし、今は幽香でいいかな。」  
足を一步運んだ。

すると強大なオーラが天子を襲った。

「っ……。！？」

天子は心が締め付けられるような感覚に襲われた。

（な、なに……。！？）

ソラは恐る恐る花畑の上空を見た。

禍々しいオーラが空間をゆがめていた。

「これは……。」

この心揺さぶられる感覚には覚えがある。いつも求めているこの間隔。

天子は気付けば、花畑の間を走っていた。禍々しいオーラを中心に求めて。

「ここにいる！絶対、彼は……。！」

天子は足を止めた。

「……。」

天子の目線の先には、ソラと幽香がいた。お互いにらみ合ったまま  
で動かない。その光景を見た天子は心で思い切り叫んだ。

（あああああああああ！！！！！あそこにいるのは、やっぱりソ  
ラと、そして幽香！！！！ドSとドSがにらみ合い、ぶつかろうとし  
ている！！！！凄い！凄い！凄い光景だああああ！！！！）

天子に気付かないソラと幽香は重い空気の中、何かを語り始めた。

「爪。」

と、幽香が言う。

「爪楊枝。」

とソラが対抗するように言っている。

（爪・・・？爪楊枝・・・？）

まだ天子は意味が分からなかった。だがソラと幽香はまだ互いに語  
り合っている。

「ロープ。」

「消しゴム。」

「バット。」

「醤油&紙やすり。」

幽香はソラを止めた。

「ちょっと待って。その醤油と紙やすりには何の意味があるの？」

「まだわかりませんか？だったら実証をしてあげます。」

ソラは花畑に向かって歩き出した。

「？」

（？）

幽香と天子はソラをみた。

「例えば、」

ソラは花畑に隠れていた天子を掴んだ。

「ふえ！？」

構わずソラは天子の腕を掴んだ。

「この腕にですね、まず、」





いに向き合った。

「じゃあ、まずお手本を。」

幽香は嬉しそうな顔をしている。いつもドMを苛めている幽香は、今度はDSを苛めるのだ。興奮しないわけがない。

(さて、どんな反応をするのかしら・・・)

そして幽香が顔をDSモードにするとソラに向かって一言言おうとした。

「ああ、そうそう。」

「？」

「俺は鏡ですから、安心して罵ってけっこうですよ」

「そう。潔いじゃない。」

潔さは評価した。さて、いざ・・・。

「貴方・・・！！！？？」

幽香は喋るのをやめた。

考えた。ソラはさつき、自分は鏡だ。罵ってくれてかまわない。最初は動かさずじまいで耐えてみせる、と思った。

しかし違う。鏡は相手を写す。だが、裏にいる自分は写らない。

写るのは、私だけ。

つまり、もし私がソラを罵った場合、今の都合上、自分で自分を罵ってしまう事となる。

言葉だけだ。しかし、私は了承した。ソラが鏡でいることを。もしそれが分かった上で罵ってしまえば、ソラは、私が私を罵る姿を楽しむ。

「まさか・・・。」

幽香はソラをみた。

ソラは、めちゃくちゃ怪しい笑顔で幽香をみていた。

「どうしました？罵って良いんですよ？ほら、罵ってみて下さい」  
言葉だけはDMだ。しかし、違う。この人は、間違いなくDSに匹敵するほどの能力・・・！

「……！」

幽香は齒を食いしばった。その光景を天子とリグルは見ていた。

「ねえねえ、どういうことよ？」

天子はリグルに問いかけた。

「多分ですが、幽香さんは今ソラさんに言葉で攻撃する事も、肉体で攻撃する事もできません。」

「何故？」

「さつきソラさんは、自分を鏡だといった。つまり鏡と言うことは、今ソラさんの前には幽香さんが写って言うということ。もしその状況で殴ったり罵ったりしたら、幽香さんポジションにいる人はそりゃ相手を傷つけている。でもソラさん側からしたら、それは相手が自分で自分を傷つけていると思いつめる。それを楽しんでる。間接的に。もしかしたらソラさんは、すごい人なのかも……。」

「どつりでさつきから幽香が押し黙っているわけね。」

そう。さつきから幽香は動けていない。

気付いてしまったからだ。ソラの作戦に。

(くそつ……!!!!!!)

幽香は必死で考えた。この状況で、ソラを打ち負かす作戦を……。

「どうしたんですか？幽香さん。」

「……ころあいを見てるのよ。」

「なるほど」

幽香はソラを睨んだ。

(みてなさい。そのすました顔を屈辱を感じた顔にしてやるわ……でも、打開策。打開策を考えなければ……。鏡……。鏡……。ミラー……。?)

幽香は何かひらめいた。

(そうか……。!)

幽香は思わず笑いを零した。

「……？」

すると幽香はソラに近づき、ソラの前にたった。

「ヤッパリあなたは鏡ね。いや、あなたは、」

幽香はニツコリ笑った。

「マジックミラー。」

「!？」

ソラは幽香を黙視した。幽香はさつきから笑ってソラをみていない。それだけで理解できた。

マジックミラー。それこそ幽香が写るが、幽香が目を瞑って笑っているということは、幽香自身は自分が見えない。しかしソラ自身は幽香が見えてしまい、罵られる事になる。

「・・・はは。」

ソラは冷や汗を流した。そして幽香から一言。

「そうやって人をいやらしい目で見ずに入られないのね。この変態。」

ソラはきつい一言を浴び、小さくくぐもった声をあげて肩膝をついた。

「くっ・・・!」

幽香はまた笑った。

勝った。この状況でも勝った。やはりドSを傷つけるのは気持ちがいい。

「うふふ・・・。残念だったわねエ・・・」

幽香は日傘をくるくる回して笑っている。ソラは息を整えた。

「はア・・・。はア・・・。やっぱり強いなア、幽香さんは。俺の鏡壊れちまったよ・・・。」

幽香はソラをみた。なにやら鞆をもぞもぞしている。

するとソラは笑顔でこつちをみた。

「そんなに強いから、こんなに面白いポエムと小説がかけるんだろ  
うなア」

ソラは2冊の本を幽香に見せ付けた。

「・・・?」

幽香はその本を見た。ソラはまじまじと本をゆらした。

その本をみた瞬間、幽香は顔を真っ赤にさせた。

「あ、ああああああ貴方！そ、そそそそそれはあああああああ！……！」

「しかし面白いですねえ。この本。しかし登場人物がだれかにそっくりだ。この蛭はー、だーれーでーすーかー？」

「あ、あああああああああ！……！」

幽香はその場で蹲った。

「勝った！善戦したあとに少し打ち負かされたけど、また打ち返した！……！」

「あの本、いつたいどこで……！」

ソラは幽香に近づいた。

「幽香さん。落ち着いてください。」

幽香は涙目でソラをみた。その姿を見て多少興奮しらソラは本をみせつけた。

「これ、俺が能力で書いた本です。つまり、中身は真っ白。幽香さんの書いた本じゃないです。」

「そ、そうなの……？」

「もちろんですよ。部屋の物色なんてするはずないじゃないですか」

幽香は少し俯いた後立ち上がり、服に付いた土を払った。

「ま、まあ……。初戦だし、最初勝たせておいていい気分にしておけば後々倒した時の快感が倍になるし、そっちも倒された時屈辱が倍に」

「でもね、幽香さん。」

「？」

「俺の出した本を見て、あんなリアクションするってことは、もちろんもってるんですよ？小説とポエム。」

幽香は呆けた顔をした。

「俺も一か八かなーって思ったけど、あんなに可愛い反応をするとは思いませんでした。蛭と女の子が主人公の話なんて、可愛いじゃ



しかし飛ばされたロープでリグルはがんじがらめになってしまった。

「ぬぐあ?!」

リグルは勢い良く引つ張られた。

「ちよ、虫小僧!？」

天子は叫んだ。

「リグルですウウウあああああああああああああ!?!?!」

リグルは空中で亀甲縛りにさて、固定された。

「むぐうううう／＼／＼／＼／＼／」

じたばたしてもリグルの顔は喜んでいた。

「うふふふふふふ」

天子はその場で足が震えた。いつにもまして幽香のいじめ度がハンパじゃない。

「・・・ソ、ソラ?」

ソラがいない。何処いったのか、とあたりを探した。

「・・・なあ、天子。」

突然首筋をくすぐられた。

「ひゃん!」

情けない声を上げ、足から崩れそうになったがソラに腕をつかまれ無理な体勢で止められた。

「っ・・・!!」

ソラは天子の耳元で優しくささやいた。

「・・・玩具か、ペット。どっちがいい?」

「オ、玩具か・・・ペット?」

その単語に反応し、身体がうずいてしまった天子は息を荒げた。

「選べよ。さっさと。」

天子はわけが分からなくなった。

そして、

不意に、

「……りよ、両方が、いいです。」

と、言ってしまった。ソラは優しい笑顔になり、ポケットから首輪を取り出した。

その姿を見た天子は、かすかに笑った。

「どうしたんですか？文さん。」

「……なにか、すっごく記事にしたい光景がどこかで起こっているような気がしまして。」

「なんですかそれ？」

「気のせいでしょうか？」

椀と文はそんな他愛のない会話をした。

\*

「うーん、中々収穫がないなあ。」

にとりは川の近くの林を探索していた。目的はソラが幻想入りしてきたほかに、なにか外の世界のものが転がっていないか探すためだ。「てつきりほかに何は入ってきてると思ったのになあ。」

色々な策を練って探したが収穫はゼロ。何も見つからない。

「やっぱりさつきソラに色々教えてもらったほうがよかったかな？  
今更悔やんでも仕方がない。この先を探したら一旦ラボに戻るう。」

「……ん？」

にとりは何かを見つけた。

木々の間になにやら鉄の塊。

「あれ……。」

にとりはそこに向かって走り出した。木々の間を抜け、広い荒野に飛び出た。

「幻想郷にこんなところが……。」

にとりは足を止めた。  
目の前に大きな鉄の塊。ロケットが置いてあった。

「これは……。」

かなり大きい。難題も設置されているロケットはただ重々しくたたずんでいた。

「なんでこんなところにロケットが。ロケットなんて作れるもの、  
私以外に幻想郷にはいないはず……。」

ロケットに近づいて触ってみた。

「鉄。それにこれは、火薬のにおいと……。後はわけの分からな  
い匂いがする。」

にとり以外に作れないロボットがここに存在する。なんだか胸がざ  
わざわしてきた。にとりはもっと近づいて何かないかと探し始めた。

「発射ア！」

と、誰かが叫んだ。



「……。」

にとりは慌ててロケットの置いてあった場所を見た。

「……一体だれがこんな、」

すると荒野の崖から誰かが出てきた。

「!?!」

にとりはステルス明細で身体を透明にし、その姿を見た。

『ハハハハ。実験大成功!』

と、低い男の声が聞こえてきた。

(実験……?)

にとりは聞き耳を立てた。他にも色々な人の声が聞こえる。だが先ほどの爆風で耳がすこしキーンとなり、かすかにしか聞こえない。

「……。」

必死で聞き耳を立てている。

だが、にとりは後方から迫っている何者かの足音に気が付かなかった。

その巨体は、にとりにどんどん近づいていき、大きな口をゆっくりと開け始めた。

(お……ああ……)

その『ブルーベリー色をした裸の巨人』は、にとりのすぐ後ろに迫った。

「!?!」

さつきを感じたにとりは慌てて後ろを向いた。

「……!?!」

だが、数秒遅かった。

その巨体は、にとりに向かって、その大きな口を高速で近づけた。

数秒後には、にとりのいた場所にはステルス明細の壊れた破片し

か残っていないかった。

## 2日目の静かなる夜（前書き）

ここから先は、さまざまなのが幻想入りしてきます。

「チャージマン研!」「青鬼」などが主流になったりしますので、分からない方はニコニコ動画などで確かめてからみた方が面白いと思われます。それでは、物語をお楽しみ下さい。

## 2日目の静かなる夜

「え……。今日はテントで泊まる?」

慧音はお茶を机においた。

「うん。ソラが泊まりに来るから。」

「?!……お前のテントにか?!」

「ああ。そこで外の世界の事について話してくれるって。」

「そ、そうか……。じ、実は私も、今日妹紅を泊めようと思って呼んだのだが……。」

「そうなのか?ああ、でもごめん。先にソラと約束しちゃったから、また明日誘ってよ!その時は喜んで泊まりに来るから。」

そういつて妹紅は慧音に御礼を言って家を出た。慧音は妹紅が出て行くと、途端に寂しそうな顔をした。

「……。まるで、お互いの事を知り合う親友みたいだな。」

慧音はお茶を啜ろうとはしなかった。

妹紅は外を見た。

「あれ、曇ってる……。?」

夕方頃まではかんかんに晴れていたのに今は空はおろか、月の光すら見えていない。

「そんなに話し込んだりしたのか。」

妹紅は自分のテントに戻っていった。

「霊夢。ちよつと変じゃないか?」

魔理沙は霊夢に問いかけた。

「なにが?」

「さっきまでずーっと晴れてたんだぜ?それが急に曇りになっちま

うなんて、おかしいだろ？」

「そう？天気なんてものは変わりやすいものよ？」

「でもさア……。」

「そういえばさつき、変なかな爆発音と突風が吹いたわね。そ  
ちのほうが変わじゃない？」

「そうか？私には聞こえなかつたけど。」

「……まあ、聞こえないほどかすかだつたしねエ。結界の方は大  
丈夫かしら？」

魔理沙はお茶を飲んだ。

「心配なら見に行つたらどうだ？お前も一応決壊にはかわつて  
る？」

「嫌よ、めんどくさい。」

「紫気絶してるんだろ？尚更じゃないか。」

「全く、なんで気絶なんかするのよ。」

「あれだろ？ソラが幻想いりしてくる時に覗き込んだから、それで  
ソラと紫の頭がゴツツンコつて落ちたろ？」

「なにそのギャグマンガみたいな落ち。そういえばアリスはどうし  
たのよ？」

魔理沙は今更気付いた。

「ああ、アリスなら一体人形を作りたいつて言ってたから残つて  
たぜ？」

「へえ。」

その頃、アリスは自宅で人形を作っていた。

「……怪我させちゃつたんだし、これくらいはしてあげないと。」  
アリスはソラを元にした人形を作っていた。

怪我させてしまったこともかねて、ソラにこの人形をプレゼント

しようと思ったのだ。

「いいなーって言ってたから、コレくらいしかできないけど、そもそも男の人って人形持ってたて恥ずかしくないのかしら？」  
なんてぶつぶつ呟いていると、ドアの方から物音がした。

「ん？」

アリスは立ち上がってドアに向かった。

「誰？」

声は聞こえない。誰かと思ってドアを開けた。

「……？」

誰もいない。悪戯だろうか。

「魔理沙かしら……？」

外に出ようとする、足に何かぶつかった。

「わつと……！」

躓きかけたが、どうにか持ちこたえた。

「何よ全く……。」

足元をみると、小包みが置いてあった。

「……小包み？」

それを手にとり、宛名を調べた。

「……宛名がない。」

一旦家の中に入り、小包みを机の上に置いた。

「誰からよ。」

少し躊躇うが、中身をみなければ分からないと思ったアリスは包装紙を破り、箱を開けた。

「！」

箱の中身は人形だった。緑色の服を来た、一昔前のような人形。

「……綺麗ねエ。」

アリスは人形を持ち上げた。

「修理してほしいのかしら？でも何処も傷ついていないし、プレゼント？なんで私に人形をプレゼントなんか……。」

そして誰から来たのか考え始めたアリスは途端に顔を真っ赤にした。

「ま、まさか・・・、魔理沙から!？」

と勘違いしたアリスは両頬に手を当てて恥ずかしかった。

「そ、そんな。こんな粋なプレゼントなんて・・・。に、似つかわしくない! 私別に誕生日でも記念日でもないのに・・・/ / /」  
なんて喜んでいた。しかし冷静になって考えてみた。

「・・・魔理沙にこんな作れる素質も、ましてや買えるお金もないわよね?」

ため息をついた。まあ、確かにそうだ。

「じゃあ、この人形は一体誰が・・・。」

やはり修理に出されたのだろうか。

「・・・ま、いつか。」

とりあえずその人形を棚に置き、身支度をした。

「さ、霊夢の所に向かわなきゃ。」

アリスは電気を消し、家を出た。

一瞬だけ、人形の目が光った。

結界の前には藍がいた。

「・・・。」

決壊が壊れていた。

「くそっ・・・!」

藍は急いで紫を起こしに行こうとした。

「何故壊れている! そんな気配はなかったはず・・・! 何故・・・!」

「橙は・・・! 橙や紫様は無事なのか・・・!?」

藍は走り出し、自宅に向かおうとした。

「まずい。まずいぞ・・・!」

だが紫が確実に起こるとは考え難い。この場合、今は霊夢の所にいくのが先決だ。そう考えた藍は方向を変え、霊夢の所に向かってい

った。

「・・・変ね。」

幽香が咳いた。

「ん？」

周りにいた3人が幽香のほうをみた。

「様々な殺気が回りに生まれてるわ。」

「殺気？」

「・・・一つ一つの殺気は弱い。でも、一つだけ周りより強い殺気が生まれてる。」

「どういうことですか？」

「分からないわね。」

幽香はまた紅茶を飲み始めた。

「・・・。」

ソラは身支度を整えた。

「それじゃあ、俺そろそろお暇させていただきます。」

「ええ。」

ソラは立ち上がり、ドアをあけた。

「・・・曇ってる。」

回りも釣られてみ始めた。

「突然ね。月明りすら見えないわ。」

相当あつい雲なのだろう。

「・・・突然発生する雲かア。チャー研のまわりに分厚い煙が発生するロケットのアレに似てるな！。あれも突然発生したっけ。」

「チャー研？」

リグルが問いかけた。

「ああ。かなーり昔のアニメ。正式名称はチャージマン研っていう





「とりあえず、俺は妹紅の所に行くが、お前はどつする？」

「！・・・行く！」

「そうか。なら黙って付いてくるんだな。」

ソラはずかずかと歩き始め、天子はその後ろをてこてこついていった。

妹紅は折れた枯木を集めて火を焚いていた。焚き火の上には味噌汁の入った鍋が設置されていた。ぐつぐつと煮えた味噌汁からはいい香りが立ち込めている。

最近味噌汁を作るのが日課になってきている。ほかにご飯を炊くくらいしかでないが、この一般的なご飯が一番上手く感じる。

妹紅はそう感じていた。

「さて、そろそろ来る頃かな。」

妹紅はソラを待っていた。目的は、ソラのことを知ることと、ソラが来た外の世界のことを知ることだった。

「・・・。」

異性と寝泊りするというのは抵抗があるが、コレも楽しみの一つになるかもしれない。

「おっと、味噌汁が吹いちゃう。」

急いでかき回すと、また味噌汁のいい香りが立ち込めてきた。

「おお、美味しそう。」

これほど美味そうにできたのは数週間ぶりだ。これは客をもっと歓迎したくなってくる。

「さーて、ソラはいつくるか・・・、」

奥から何か聞こえる。

「な・・・？」

なにかを潰すような音だ。なんだろう。

気になった妹紅は鍋を火から遠ざけてその場に言ってみた。

「そっぴいや数時間前からなんか変な気配があるな……。」  
いつもの悪戯を仕掛ける妖精の気配でも、ましてや輝夜が私を倒しに来る気配でもない。一体何の気配だというのか……。

「ひょっとしてその根源が近くにいるのか……?」

妹紅は息を殺して近づいた。どんだんなにかを潰す音が近づいている。

妹紅は息を呑んだ。そして木の影から何かを覗いた。

「!?!?」

「ソラ、痛い……。痛いよ……。」

「踏まれてんのに気持ちいいのかよ。やっぱりDMだな。お前。」

ソラは踏むのを止めた。

「あ、駄目! やめないで! お願いします……っ!?!?!」

天子にやめないでといわれたソラはさらに嬉しそうな顔をした。

「おい、お前ペットだろ。何で言葉喋ってんだ。」

「あ……にや、にやあ……ノノノ」

ソラと天子の行動をみた妹紅は少し引き気味な顔で2人を見ていた。

「……。」

この時、妹紅は思った。

私は、この人と夜を共にして良いものかと。

ソラは顔を覆って頂垂れていた。

「……ごめん。」

悪いことをしてもいないのに妹紅は謝ってしまった。

「見られちまったよ……。天子苛めるのに夢中になってて竹林にいるの気がつかなかった……。」

「……ああ、凄い光景だったよ。」

さらにソラは頂垂れた。

「だ、大丈夫だ！せいへ・・・、趣味は人それぞれだから！」

ソラは地面に顔をこすり付けた。

「うああ?!ち、違う!あれだよな?今後ろで喜んでいる天人が踏んでくれて言ったんだよな?そうなんだよな?」

「・・・。」

ソラは視線をそらした。

「違うの!?!」

「暇だったもので。」

「暇で人を踏むのはもう逃れられないよ!お前は幽香か!?!」

「俺は甘党だ!」

「だろうね!」

ソラと妹紅はなんだかよくわからない会話を繰り返した。

「あ、そうそう。向こうにはどんな人がいるんだ?」

この会話を続けられそうにないのでソラに別の質問を聞いてみた。  
「ん、ああ。紫が大好きな奴がいたり、文が大好きな奴がいたり、諏訪子が大好きな奴がいたり。」

「個性的なやつらだな・・・。」

「こつち来てたら絶対に理性保ててねえな・・・。」

「怖いな・・・。」

お互い黙り込んだ。すると天子が起き上がった。

「ああ、気持ちよかった・・・/ / /」

天子はこちらを向いた。

「あれ、あんたら何はなししてるのよ。あたしも混ぜてよー。」

ソラはため息を吐いた。

「仲間はずれって言うのはいまいちただけじゃないわ。というわけで、その不老不死。私にソラの隣を譲りなさい。」

「ん、ああ。」

天子は無理やりソラの隣に入ってきた。

「っ・・・。」

ソラは聞こえないように小さくしたうちをした。

「ねえ、ソラ。やっぱりこういうところは止めてうちにきなさいよ。温かいわよー？」

「。。。。。」

ソラは微笑しながらこめかみに血管を浮かべてきた。

「照れなくてもいいのよ。全く、照れやなんだからソラは」

天子は背中をばしばし叩いてきた。

ソラはとうとう目を見開いて天子に向かって何かを投げた。

「およ？」

(束縛「玩具犬の拘束首輪」トイドッグチェーン」)

新しい技が発動し、大量の首輪や手錠を実体化させたソラは天子に向かつて手錠と首輪を投げつけた。

天子は大木に拘束された。手首はロープと手錠で縛られ、目隠しされ、しかも首輪を大木に繋がれているので一ミリも動けない。しかも少し肌を露出させられている中、自動で動画撮影されている。

「んんー。。。。んんー。。。。／／／／／／／／／／」

天子は心なしに笑っているように見えた。

「ったく。。。。。」

ソラは無表情で怒っている。

「。。。。ああいうことされたら、ソラでも怒るんだな。」

「当たり前だろう。」

「まあいいや。あたしもなんだか関わりたくなってきたよ。」  
とりあえず喘いでいる天子はさておき、ソラと妹紅は竹林と道の間  
の草が生えているところに場所を移動していた。ここからなら月も  
見え、寝転がるには丁度いい斜めの地形となっているので最適だと

妹紅は考えた。今は曇っていて月は見えないが、場所はいい。

「おお、確かに良いところだな。場所も広いし。」

「だろ？私もお気に入り場所だ。慧音も知ってる。」

「仲良いんだな。」

ソラにそういわれた妹紅は小さく笑った。

「ああ。あいつにはお世話になりっぱなしだからな。いい奴だよ、慧音は。」

「ああ、俺もあの人はいい人だと思うよ。第一印象であそこまでいいと思える人は初めてだ。」

「うん、そうだなア。」

と、やっと会話に調子を取り戻した。

「……………」

その後ろで顔を真っ赤にしている慧音がいた。

「も、妹紅が、私のことをあそこまで……………」

心配になって付いて来ていた慧音は話しかけようと思っていたのだが、こんな事を言われては出れるわけがない。

「……………！」

心臓がバクバク高鳴って、ばれやしないかと不安になってきた。

（な、なぜこんなにドキドキする！？私は、妹紅とずっと一緒にいるのに……………、こんな、妹紅の言葉で……………なんで……………。）

息苦しくなってきた。なんだか妹紅の近くにるのが難しくなってきた。

「なあ、ソラ。」

妹紅がソラに話しかけていた。慧音は聞き耳を立てた。

「ソラは、寂しくないか？」

ソラは妹紅のほうを見た。

「……………なんで？」

「だってさ、お前はもともと外の世界から来たんだろ？友達だって

いるし、知り合いだっているはずだ。帰れる方法が分からないなら、もしかしたらソラは、ずっとここで暮らさなきゃならない。それは、寂しくないのか？」

ソラは妹紅を見つめた。すると静かに言葉を発した。

「・・・確かに、あいつらとこれから会話できなくなるってのはつまらない。いい奴らだしな。馬鹿で大騒ぎする奴らで、エロイ奴もいれば凶暴な奴もいて、オタクで、マニアで、アニメ好きのエロゲ好きのギャルゲ好きのやつらも、ロリコンも、巨乳好きのやつもいる。」

「それほとんど悪口・・・。」  
するとソラはかすかに笑った。

「でもな、俺はそういう馬鹿な奴らが大好きなんだよ。馬鹿は時として、天才を超える。馬鹿じゃなきゃ、空を飛ぶなんてことも考えなかったし、地球の外へ旅立つなんてことも考えなかった。だから俺はそんな馬鹿な奴らが好きなんだ。同時に無茶する奴もな。」  
妹紅は少し吃驚している。

「幻想郷の皆もさ、すげーいい奴らばかりじゃん。こんなマニアな一面もあって、かつこよくもなくって、甘党で厨二病で、頭も悪いドSな俺を、皆は明るく歓迎してくれた。」

ソラは幻想郷にきてからの皆の笑顔を思い浮かべていた。

霊夢にお賽銭をあげたときの笑顔。魔理沙と意気投合した時の笑顔。萃香と仲間と認め合った時の笑顔。天子と遊んだ時の笑顔。チルノと親友になると約束した時の笑顔。全てが鮮明に蘇った。

「なんかさ、助けられたんだよな。自分の人生はつまらなくて、それでいて、捨て難い。そんな人生が、今とっても明るくなってさ。」  
ソラは上空を見ながら笑顔になっている。

するとソラは妹紅のほうを見た。

「実はさ、幻想郷の住人の中で、一番に好きになったの、妹紅なんだよ。」

そついわれた妹紅は肩を振るわせた。

「わ、私!？」

「そう、妹紅。」

妹紅はどどん顔を赤くしていった。

「で、でも・・・、なんで？」

「なんで?んー、なんていうか・・・、憧れだったのかもしれないな。」

後ろにいた慧音は静かに聞いていた。

「・・・憧れ。」

妹紅も同時に聞いていた。

「憧れ？」

「そう。この竹林で、一人で頑張って生きている姿にさ、惚れ込んだのかもしれないな。それが、異性としてなのか、それとも親友としてなのかはわからないけど。」

ソラは頬を指でかいた。

「まあ、これは向こうで言ったら妄想オタクっていわれるんだろうけどなw」

今まで溜め込んでいたものを出し切ったようなソラは腕を伸ばして地面に寝転がった。

「・・・。」

それを見ていた妹紅も同じように横に寝転がった。

ソラの横顔をじっと見た。

なんだかその顔は、大人っぽいところもあるけど、どこか少年っぽくて、不思議だった。

「・・・。」

その後ろで慧音は薄く笑っていた。

「・・・まるで、付き合いたての恋人同士だな。」

その場を離れようとした。すると隣から声が聞こえた。

「ねえ、目隠しとってくれない？」

さっきまで激しく動いていた天子がおとなしくなっている。

「……。」

天子の姿にも驚いたが、慧音は臆することなく目隠しを外した。

天子はソラと妹紅の姿を見た。

「……。」

慧音は天子の目を見た。

その目はどこことなく寂しそうで、悲しそうな顔だった。

「あの二人、邪魔しないほうがいいのかしらね。」

天子は重々しく言った。

「私にはどうする事もできない。人の楽しみを邪魔するほど、私は外道ではないからな。」

「……でも、あんたも妹紅のことは大好きなんですよ？」

「……ああ、そうだな。」

すると天子は少しだけ強い口調で言った。

「私もね、ソラがけっこう好きだわ。」

慧音は天子を見た。

「……幻想郷の皆は、わたしがこんな性格だから数分絡んだだけでみんな別のところへ言ってしまう。今まではそんなの構わなかった。換わりに絡んでくれる人はいっぱいいたわ。幽香だったり、衣玖だったり。暇なときも有ったけど、ソラが来てからは何かが違った。」

天子は微かに笑った。

「凄く嬉しかったのよ。いつでも私と一緒にいてくれて、遊んでくれて、苛める事もあったけど、それも凄くうれしくて。見た目は普通なのにさ、なんだか、離れると凄く寂しくて、嫌だった。」

天子は軽く頷垂れた。

「本当は、二人つきりで過ごしたかったわ……。でも、ソラは霊夢の所に行ったり、幽香のところに行ったり、私とは二人つきりでいてくれない。だから、少しだけイライラすることも有ったわ。」

「……こんなことあんたに言っても仕方ないわよね！何言ってるん

だろ、私。さ、もういいわ。ソラがせっかく仕掛けてくれた目隠し、もう一度してくれる？早くしないと興奮がおさま」

「お前はいいやつだな。」

慧音にそんなことを言われた天子は慧音のほうを見た。

「……え？」

「……それほどまで、人を愛せるのは、いい奴な証拠だ。ソラもきつと、それをわかっていてくれてる。もしソラがお前のことが嫌いだったら、絶対にこんなことはしてもらえないと思うぞ？」

天子は驚いている。

「で、でも……、ソラさつき、妹紅に好きだつて……。」

「私だつて好きな人は沢山いるさ。妹紅だけじゃない。チルノや大妖精やリグルや、もちろんルーミアだつて好きだぞ？皆明るく、とても素敵な者たちだ。」

「それ、貴方の寺子屋の生徒じゃない。」

「それがどうした？世の中に好きになつちゃいけない人はいない。例えばそれが恋愛でも、親友でも、好きと言う言葉はどんなスペルカードよりも、弾幕よりも、とても強いものだ。」

慧音はソラと妹紅を見つめた。

「……ソラは憧れだといった。それも好きということ。お前のソラを思う気持ちも好きということ。私の妹紅に思う気持ちも、好きということだ。」

慧音の言葉を聞いた天子は少々恥ずかしくなってきた。

「……綺麗事いっちゃってんのよ。」

「悪かったな。」

天子は声を張り上げた。

「もう、いいからその目隠し早く戻しなさい！もう興奮が切れちゃうでしょうが！」

「はいはい、わかったわかった。ほら、アイマス」

慧音は動きを止めた。

「ん？どうしたのよ……。」

天子は慧音の手を見つめた。

震えている。

「ちょ、ちよつと・・・、どうしたのよ。」

「あ、あそこにいるのは・・・。」

「え、なに？」

慧音は恐る恐る指を差した。

「ん・・・？」

天子は細目でソラと妹紅のほうを見た。

なんとそこには、ルーミアがいた。

「・・・お兄ちゃん、みつけたのかー。」

ルーミアは鋭い眼光でソラを見つめている。

「げエっ！？常闇の精！？」

天子は叫んだ。

「まずいぞ。ルーミアがあそこにいるとソラがかなり危険だ・・・。」

ソラ！早くそこから逃げろ！ソラ、聞こえないのか！？」

慧音は大声で叫んだ。

「ソラ逃げて！超逃げて！！！」

しかし、眠ってしまっているのか動こうとしない。

「くそっ・・・！ルーミア！その人は食べちゃいけない！ルーミア

！」

慧音が叫んでもルーミアは聞こえていないらしい。

「うそオ！？」

天子はもがいた。

「ちよつと！ソラ助けてくるからコレ外して！」

「あ、ああ。分かった・・・！！！」

慧音は天子を縛っているロープや手錠を外そうとした。

「ちよつと！なにしてるのよー！」

中々拘束具が外れない。









「ソ、ソラ！妹紅は！妹紅は無事か！？」

ソラは抱きかかえていた妹紅を慧音に引き渡した。

「大丈夫に決まってるんだろ。それより、お前ら無事か？」

「私は大丈夫だ。だが、ルーミアが精神的にダメージを食らっている。」

ルーミアはまだ震えていた。

「そうか……。」

するとソラがルーミアの頭をなでた。

「残念だったな。俺を食べられなくて。」

ルーミアは少しだけソラを見た。

「でもごめんな。今急用が出来ちまった。」

ルーミアから手を放すと、ソラは鋭い眼差しでその巨体を睨んだ。

「……幻想郷でお前の姿を見るとは、夢にも思わなかった。」

その巨体はゆっくりとこちらを睨んだ。

「……何故だ。何故。」

そのブルーベリー色をした全裸の巨人はにたりと笑った。

「なぜ、青鬼が、幻想郷に姿を現す……。」

とつとつ、異変が始まった。

## 襲い掛かる異変

青鬼はにたりと笑ってこっちに近づいてきた。

「逃げる……。」

周りにいた人たちはソラを見た。

「あいつは絶対に倒せない。だから、今は逃げる！」

ソラの合図とともに、周りにいた者達が散り始めた。

その瞬間、青鬼は猛スピードで追いかけて始めた。

「ソラ！あれはなに！なんなのよ?!」

天子は走りながらソラに問いかけた。

「あれは青鬼だ！空想世界の化物で、人を喰らい、どこまでも追いかけてくる最悪の化物だ！」

「なんであんな奴が幻想郷にいるのよ!!!」

「俺は知らん!!!」

2人は並走した。

「ちよつと……！慧音達がいらないわよ！」

「別れたんだ！慧音は青鬼を困らせようとして二手にわかれたんだよ！」

「でもあの化物、こっちに来てるじゃない!!!」

「だからしらねえって!!!」

どンドン青鬼との距離が近くなってくる。これは危険すぎる。  
「……!!!」

天子のスピードが落ちてきている。

「天子!？」

息がきれるのが早すぎる。

「そ、そんな……。」

天子のスピードが尽きようとしていた。

「つく……!!!」

ソラは天子の手をひいた。

「!?!」

「俺から離れるな、天子!!!!!!」

ソラは天子の手を引いて、角を曲がった。

青鬼はあたりを見回し、そしてそのまま奥へと消えていった。

「はア……。はア……。」

ソラと天子はその場でへたり込んだ。

「……ソラ、どういうこと?これは異変?」

「分らん。でもその可能性は高い。」

ソラは低い学習能力で考えた。

「……ともかく、霊夢のところだ。そこにいけばなんとかなる。」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9779w/>

---

甘党絵描きが幻想入り

2011年10月26日01時59分発行